青森県埋蔵文化財調査報告書　第315集

近野遺跡 Ⅵ

－県立美術館建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－

２００２年３月

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書　第315集

近　野　遺　跡　Ⅵ

－県立美術館建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－

２００２年３月

青森県教育委員会

序

近野遺跡は縄文時代中期から後期にかけての遺跡として著名です。これまでにもいくたびか発掘調査が実施されてきましたが、昭和52年の発掘調査で検出された大形住居跡は、その後各地で発見されだした大形住居跡の先駆けとなったものです。

その周辺は運動公園内に遺跡広場として整備され、現在は、一部が三内丸山遺跡とともに国指定特別史跡の一角を占めるに至っております。

今回の発掘調査では、縄文時代と平安時代の遺構・遺物が確認されましたが、特に平安時代の木製品が注目されます。近野遺跡周辺には大規模な平安時代集落があったことはこれまでの発掘調査でも判明していましたが、これらの木製品は近野遺跡の新たな一面を物語ってくれるものと期待されます。

この発掘成果が、広く文化財の保護と研究に活用され、また、地域社会の歴史学習や文化財保護意識の高揚につながることを期待したいと存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施と報告書作成にあたり御協力、御指導を賜りました関係各位に対しまして、厚く御礼を申しあげます。

平成14年３月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長　中島邦夫

例　　言

1　本報告書は、県立美術館建設事業に伴い平成12年度に実施した青森市近野遺跡の発掘調査報告書である。

2　この遺跡は、平成10年３月に青森県教育委員会が編集発行した『青森県遺跡地図』に、遺跡番号０１０６５として登録されている。

3　執筆者の氏名は各章末に記してある。

4　資料の分析、鑑定については、下記の方に依頼した（敬称略）。

石器の石質鑑定	八戸市文化財審議委員	松山　力
木製品等の樹種同定	木工舎「ゆい」	髙橋　利彦

5　本書に掲載した遺跡の位置図は、国土地理院発行の「青森西部」2.5万分の１地形図を加工したものである。

6　挿図の縮尺は、図ごとにスケールを付した。

7　遺物写真の縮尺は不統一である。

8　堆積土の色及び土器の色については『新版標準土色帖』（小山正忠、竹原秀雄　1993）を用いた。堆積土中の混入物の大きさについては便宜的に次のとおり表記し、それ以外のものは適宜形状と大きさを記した。

・粒状のもの

「粒」＝粒径２㎜以下のもの、「中粒」＝２～５㎜程度のもの、「大粒」＝５～10㎜程度のもの

・塊状のもの

「小塊」＝粒径10㎜以下のもの、「中塊」＝10～20㎜程度のもの、「大塊」＝20～50㎜程度のもの

9　本稿で使用した遺構の略号はＳＩ＝竪穴住居跡、ＳＫ＝土坑、ＳＤ＝溝跡とし、その前に調査区名を付した。例えばＢＳＫ－４とはＢ区第４号土坑の意である。

10　引用・参考文献は、表１に示した。

11　発掘調査における出土遺物、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。

12　遺物観察表の凡例は以下のとおりである。

・　遺物観察表は実測図に表現できない項目を中心とした。

・　法量の単位は㎝である。＜　＞は現存値を、（　）は推定値を示す。

・　胎土への混入物の略号は以下のとおりである

Ｗ＝白色粒子（White）、Ｂ＝黒色粒子（Black）、Ｒ＝赤色粒子（Red）、

Ｃ＝透明粒子（Clear）、Ｓ＝砂、粗＝粗砂、針＝海綿骨針、土（土器片粉末）を示す。

・　色調は標準土色帳に基づいた表記であり、その近似色を含む。

・　焼成は良好なものをＡ、不良なものをＣ、両者の中間をＢとした。

・　残存率は実測図に示した部位における現存部の比率であり、器形全体に占める残存の度合いを示すものではない。

目　次

序
例言
目次
挿図目次・表目次・写真図版目次

第１章　発掘調査の概要……1
　第１節　調査要項……1
　第２節　調査の方法……1
　　1　調査区名について……1
　　2　グリッドについて……2
　　3　その他について……3
　第３節　調査の経過……4
　第４節　遺跡の環境……4
　第５節　周辺の遺跡……5

第２章　遺構と遺物……11
　第１節　概要……11
　第２節　Ａ区の調査……14
　第３節　Ｂ区の調査……15
　　1　概要……15
　　2　縄文時代の遺構……15
　　3　平安時代の遺構……16
　　4　遺構外出土遺物……17
　第４節　Ｃ区の調査……30
　　1　概要……30
　　2　検出遺構……30
　　3　出土遺物……30
　第５節　Ｆ区の調査……33
　　1　概要……33
　　2　出土遺物……33

第３章　まとめ……45

第４章　自然科学的分析……46
　第１節　青森市近野遺跡出土材の樹種……46

写真図版

報告書抄録

挿図目次

図1　遺跡の位置と周辺の遺跡……8
図2　遺跡及び周辺の土層……9
図3　近野遺跡周辺の調査……10
図4　近野遺跡・三内丸山遺跡のこれまでの調査……12
図5　2000年度の調査区……13
図6　A区出土遺物……14
図7　B区遺構配置図……18
図8　B区第4号土坑……19
図9　B区第1号竪穴住居跡……20
図10　B区第1～3・5号土坑、第2号溝跡……21
図11　B区第1号溝跡……22
図12　B区第3号溝跡……23
図13　B区第5号溝跡……23
図14　B区遺構内出土遺物（第4号土坑－1）……24
図15　B区遺構内出土遺物（第4号土坑－2）……25
図16　B区遺構内出土遺物（第4号土坑－3、第2・5号土坑、第2号溝跡）……26
図17　B区遺構外出土遺物－1……27
図18　B区遺構外出土遺物－2……28
図19　B区遺構外出土遺物－3……29
図20　C区遺構配置図……31
図21　C区出土遺物……32
図22　F区土層断面……34
図23　F区出土遺物－1……35
図24　F区出土遺物－2……36
図25　F区出土遺物－3……37
図26　F区出土遺物－4……38
図27　F区出土遺物－5……39
図28　F区出土遺物－6……40

表目次

表1　周辺の遺跡……6
表2　縄文時代土器……41
表3　縄文時代石器……42
表4　平安時代土器……42
表5　平安時代木製品……43

写真図版目次

写真1　遺跡の空中写真……49
写真2　A区の調査……50
写真3　A・B区の調査……51
写真4　B区の調査……52
写真5　B区の調査……53
写真6　C区の調査……54
写真7　F区の調査……55
写真8　A・B区出土遺物……56
写真9　B・C・F区出土遺物……57
写真10　F区出土遺物……58

第１章　発掘調査の概要

第１節　調査要項

1　調査目的

県立美術館建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する近野遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存して、地域社会の文化財の活用に資する。

2　発掘調査期間　平成12年４月19日～平成12年９月29日

3　遺跡名及び所在地　近野遺跡（県遺跡番号01065）
青森市大字安田字近野219、他

4　調査面積　３，９００平方メートル

5　調査委託者　青森県教育庁美術館整備・芸術パーク構想推進室

6　調査受託者　青森県教育委員会

7　調査担当機関　青森県埋蔵文化財調査センター

8　調査体制

調査指導員　村越　潔　青森大学教授（考古学）

調　査　員　山口　義伸　青森県文化・スポーツ振興課県史編さん室総括主幹（地質学）
葛西　勵　青森短期大学助教授（考古学）

調査担当者　青森県埋蔵文化財調査センター

所　長	中島　邦夫
次　長（調査第一課長兼務）	成田　誠治
総務課長	西口　良一
文化財保護総括主査	太田原　潤
文化財保護主事	赤羽　真由美
調査補助員	今　洋子、羽賀　沙織、藤原　咲子、奈良岡　詩織

第２節　調査の方法

今回の発掘調査における調査区、グリッドは、1997年報告分の試掘調査に用いたものを基本的に踏襲したが、一部変更もある。詳細は以下のとおりである。

1　調査区名について

平成６・７年度の調査の報告書である『近野遺跡Ⅴ』（青森県教育委員会 1997）に調査区の区分が示されているが、便宜上Ｃ区、Ｅ区については範囲の解釈を若干変更し、今年度以降の調査範囲を勘案して以下のとおり再定義する。

A区

通称ヤマトラ道路付近の平坦地からその下位の斜面地にかけての雑木林の一帯をA区とする。地形区分上は中位段丘面およびその段丘崖にあたる。

B区

アーチェリー場付近以東の比較的平坦な一帯で、A区より下位の緩傾斜地及びF区に向けての緩傾斜地を含む。地形区分上は低位段丘面を主体とする。

C区

F区の谷頭の南東付近で昭和50年度の調査区の南側で、地形区分上は低位段丘面上である。

D区

F区の谷と分岐し、E区東側に回りこむ谷付近。

E区

F区東側の比較的平坦な一帯で、プロムナード及びその両脇の杉林周辺を含む。地形区分上は低位段丘面にあたる。

F区

B区とE区に挟まれた谷に形成された低湿地を主体とし、その谷へ向けての急傾斜地を含む。調査開始直前の状態は、公園造成時の盛り土で厚く被覆されていた。

2　グリッドについて

運動公園造成以前の発掘調査におけるグリッドはそれぞれ任意に設定されていたが、1997年報告分の試掘調査では、新総合運動公園として一体整備される予定だった隣接する三内丸山遺跡との関係を重視して、三内丸山遺跡のグリッドを延長し、同一の体系に基づいて呼称されていた（以下「三内丸山グリッド系」と仮称する）。しかしながら、今後の調査対象区の全てが、三内丸山グリッド系の記号ではカバーしきれないため、今回新たな呼称方法を用いることとした（以下「新近野グリッド系」と仮称する）。呼称方法は異なるものの、グリッドの方眼自体は両系とも全く同一のものである。

新近野グリッド系

グリッド原点の座標値は平面直角座標第X系のX＝90260、Y＝－11160mである。グリッドは4m×4mとし、その記号は、Yラインに二文字の大文字アルファベットを、Xラインに三桁の算用数字を付した。アルファベットは、右側文字を4m毎に順次繰り上げAからTまでの20文字を使用し、Uに相当するラインを再びAとし左側文字を一つ繰り上げた。即ち、基点を南北に貫くYラインをAAとし、そこから東に向けて4m毎にAB、AC・・AT、BA、BB・・とした。80m毎に左側文字が繰り上がることになる。算用数字の方は基点を東西に貫くXラインを000とし、そこから南に向けて4mごとに001、002・・とした。

グリッドの呼称は、当該方形の北東角の記号をアルファベット優先で読み、DB－216のごとく呼称した。

三内丸山グリッド系との異同

先述したように、4mメッシュに区切られた方眼そのものは両系とも全く同じである。三内丸山グリッド系における80m毎のローマ数字の変わり目と新近野グリッド系の左側アルファベットの変わり目も一致する。また、4m毎に付された数字及びその附加方向も両系とも全く同一である。大きく異なるのはアルファベット記号の附加方向で、三内丸山グリッド系が東から西に向けて昇順となるのに

対し、新近野グリッド系は正反対に西から東に向けて昇順となる。グリッド北東角の杭名をグリッドの呼称とするのは三内丸山グリッド系と同様である。

三内丸山グリッド系の基準となったのは野球場建設工事用の基準杭であり、№21基準杭がⅥＡ－100になるようにグリッドが組まれている（下記の注意点参照）。また、1997年報告分の近野遺跡の調査ではＩＡの東側に０Ａ～０Ｔを追加設定している。今回報告する範囲はこの追加設定した範囲内に収まるものではあるが、今後の調査が０Ａのさらに東側に及ぶことも予想されたことから、今回グリッドに変更を加えることとしたものである。

三内丸山グリッド系のⅥＡ－100は新近野グリッド系ではＡＡ－100となり、座標値はＸ＝89860、Ｙ＝－11160である。

注意点

三内丸山グリッド系では、工事用基準杭№21をⅥＡ－100としたと先に記したが、報告書には№21杭をＶＡ－100とした旨が記載されている（青森県教育委員会　1994・1997他）。しかしながら、実際のグリッドは№25杭がＶＡ－100となり、№21杭がⅥＡ－100となるように方眼が組まれ、その後の報告書でもそれが踏襲されている。報告書には基準とした杭の位置や座標値が示されていないため遺構図、遺構配置図上では特に問題になることもないが、工事用基準杭をもとにグリッドや座標を計算する場合は注意を要する。

また、三内丸山グリッド系は方位についても注意を要する。報告書（前掲）では、基準杭№21と№20を結ぶ線を東西の基準線、それに直交する線を南北の基準線とし、南北方向の基準線は磁北を示していると記載され、その後の報告書にも同様の記述がある。しかしながら、グリッドの基準となった工事用基準杭は、平面直角座標第Ｘ系に基づいて設置されたものであるので、グリッドの南北基準線が示すのは両体系とも座標系上の北であって磁北とは異なる。座標系上の北と子午線上の北（所謂真北）の差は問題にならない程度であるが、磁北との差は小さくない。遺跡付近の現在の磁気偏角は約８度西偏であるので、グリッド上の北と磁北はその程度ずれていることに注意しなければならない。ちなみに、№20杭の座標値はＸ＝89860、Ｙ＝－11180、№21杭はＸ＝89860、Ｙ＝－11160、№25杭はＸ＝89860、Ｙ＝－11080ｍである。

ところで、改正測量法が2002年４月に施行予定であり、日本測地系から世界測地系に移行することになる。青森県周辺は両者の差が大きく出る地域ではあるが、調査の継続性を考えると、近野遺跡では改正後も当面は現行の座標系に基づいた上記のグリッドを使用したほうが混乱が少ないものと思われる。図上にはあえて表記しなかったが、例えばＢＡ－200グリッドは現行の日本測地系ではＸ＝89460、Ｙ＝－11080ｍであるが、新しい世界測地系ではＸ＝89766.8531、Ｙ＝－11377.9507ｍとなることを付記しておく。三内丸山遺跡や従前の近野遺跡の調査で用いられた三内丸山グリッド系の座標値を改正後の世界測地系に換算する場合はこれまで述べたような問題にも注意する必要がある。

３　その他について

遺構検出は随時行い、発見順に遺構名を付し、原則として１／20で実測図を作成した。遺構名には以下の略号も用いた。竪穴住居跡＝ＳＩ、掘立柱建物跡＝ＳＢ、土坑＝ＳＫ、溝跡＝ＳＤ。

遺構以外の出土遺物の取り上げは、グリッド単位で行った。

調査にあたっては、土層の堆積状況を観察するため適宜セクションベルトを設定し、土層注記は

『標準土色帖』を用いた。土層の名称は、基本層序については表土から下位にローマ数字を、遺構内堆積土については上位から下位に算用数字を付すことを原則としたが、低地部等については遺構以外の層序にも算用数字を用いた。

写真撮影は適宜行うこととし、カラーリバーサル、ネガカラー、モノクロームの各種類のフィルムを使用した。

なお、今年度の調査は現運動公園の立木や構造物を撤去しないという制約があったため、各調査区内において全貌が検出された遺構については精査を行ったが、大半が調査区外にかかる遺構については、構造物等の撤去後に精査を行うこととし、今回は平面形の確認だけに留めた。

第3節　調査の経過

4月19日、調査機材を搬入し、まずB区の表土除去から作業を開始した。今回の発掘調査は、公園機能を維持したまま、原則として構造物の撤去や立木の伐採はせず、調査終了後埋め戻す前提で調査を進めることとなっていたため、各調査区とも調査区をさらに小分割して調査と埋め戻しを交互に進めることとなった。

B区はまず5月中旬までに南半部の遺構確認と精査を終わらせ、埋め戻しを行ったあと、それまで廃土置き場としていた北半部の遺構確認と精査を6月上旬まで行った。

C区の調査は6月上旬に着手し、7月上旬までに終了した。

A区の調査は、5月中旬に着手し、B区、C区と並行しながら断続的に進めた。

F区の調査は、着手の条件となっていたグランドゴルフ大会終了を待って7月上旬から表土除去を開始した。F区は本来谷であり、それを埋め立てるための盛り土が非常に厚く、場所によってはその厚さが9m以上にも及ぶ部分もあり、しばしば崩落して調査に支障をきたした。

精査は各区とも9月20日までに終了し、同日空中写真撮影を行った。その後埋め戻し、整地、芝の復元等を行い、10月27日までの当初予定をほぼ1ヶ月短縮して全工程を終了した。

第4節 遺跡の環境

遺跡周辺の地形と地質については、『近野遺跡Ⅴ』や、隣接する三内丸山遺跡等の報告書に詳しい(山口　義伸　1994、1997他)。詳細はそれらに譲ることとし、以下にそれらを参考にした概要を含めながら遺跡の環境を記す。

近野遺跡は青森市西部を流下し陸奥湾に注ぐ沖館川右岸に広がる段丘上に位置する。国指定特別史跡三内丸山遺跡は本遺跡の北西に隣接し、史跡範囲は本遺跡の一部にも跨る。本遺跡内に開析した谷は三内丸山遺跡に開析した谷と合流し、沖館川に開口している。今回の調査区は標高18m前後の低位段丘面上を主とするが、A区は中位段丘にかかり、F区は低位段丘上に開析した谷にかかる。

中位段丘は市西部の丘陵地の東側に広がり、その東側に接する低位段丘とは比高約10mの段丘崖で接する。低位段丘の外縁には扇状地が分布する。なお、中位段丘と低位段丘の境界は近野遺跡内においては現県民体育館付近にあたる。

西部丘陵地では基盤岩を不整合に覆う2枚の火砕流堆積物が知られ、それぞれ八甲田山の田代平カルデラの形成時に流下したものと考えられている。より古期の八甲田第1期火砕流堆積物は今から約65万年前に、それより新規の八甲田第2期火砕流堆積物は約40万年前と推定されている（村岡・長谷1990）。

中位段丘の土層は三内丸山遺跡の旧バス停付近の土取りあとの路頭でみられたが、八甲田第2期火砕流堆積物より上位の堆積物が観察できた。広域火山灰としては洞爺湖形成の約12万年前の噴火に起因すると考えられる洞爺火山灰が確認され、中位段丘の指標となった。

低位段丘には黄褐色ラビリ質の軽石層がのり、約12,000年前の十和田火山起源の千曳浮石に対比されている。また、黒色土中や低地部においては915年十和田火山噴出と現在考えられている十和田a火山灰、その数十年後飛来したと推定される白頭山・苫小牧火山灰も部分的に観察される。

調査区の現状はA区が雑木林、B区、C区、F区が公園である。A区は自然の状態を留めているように思われたが、一部盛り土に覆われていた。F区は最大9m程度の盛り土に覆われていたが、自然の状態に土盛りをしたのではなく、一度削平した後に土盛りをしている範囲が大半であった。C区も同様に削平後に土盛りしている部分が少なからずあったが、杉林部分はあまり削平されていないようであった。

第5節　周辺の遺跡

近野遺跡をのせる段丘周辺上には多数の遺跡が分布する。沖館川下流右岸には小三内遺跡、三内丸山遺跡、三内遺跡が、左岸には三内沢部(1)～(4)遺跡が連なり、三内遺跡と三内丸山遺跡の間に合流部をもつ支流沿いには、三内丸山(3)～(6)遺跡、安田(2)遺跡が所在する。その合流部よりさらに1.2kmほど上流でもう一本の支流が合流するが、その支流と本流に挟まれた丘陵地には岩渡小谷(1)～(4)遺跡が立地する。岩渡小谷(2)遺跡は支流左岸、(3)、(4)遺跡は本流右岸に、(1)遺跡は間の尾根上に位置する。熊沢遺跡は岩渡小谷(4)遺跡の対岸である。

沖館川の本、支流流域には多数の谷が開析しているが、本遺跡にも沖館川に開口する谷がある。この谷は途中で三内丸山遺跡内にも分岐している。両遺跡はこの谷を挟んで隣接している。

周辺の遺跡は縄文時代前期から後期にかけてのものと平安時代のものが多い。

縄文時代前期では本遺跡に隣接する三内丸山遺跡、南西方約2.5kmに位置する熊沢遺跡が代表的な遺跡である。後者では昭和50～51年度の調査で円筒下層b式期の集落跡が検出され、捨て場から大量の遺物が出土した。同遺跡では平成9年度の発掘調査でも良好な資料が出土し、隣接地の岩渡小谷(4)遺跡では平成12・13年度の調査で同期の集落跡が検出され、谷部分から木製品が良好な状態で出土している。

縄文時代中期の遺跡としては三内丸山遺跡、三内沢部遺跡などがある。三内丸山遺跡は本遺跡の北西に隣接し、膨大な遺構、遺物が出土している。菅江真澄による江戸時代の記録も残るが、近年刊行された著作物も数多い。2000年には国特別史跡にも指定されている。本遺跡においても三内丸山遺跡と重なる時期の縄文時代中期後半の大形住居跡が1977年の発掘調査で検出されており、周辺が遺跡広場として整備されていたが、その付近は三内丸山遺跡と一体で国指定特別史跡の範囲に組み込まれて

いる。

近野遺跡は縄文時代後期の遺跡としても著名であるが、同期の遺跡には三内丸山(6)遺跡などがある。前者は本遺跡の南方約１kmに位置し、平成９～11年度の調査で足形付土版、熊形土製品、柱材などが出土して話題となった。

縄文時代晩期の資料は近野遺跡でも確認されているが、良好な資料が出土した遺跡としては細越遺跡が上げられる。細越遺跡からは大洞ＢＣ、C_1、C_2期を中心とした良好な資料や土笛等の土製品、土偶等が出土している。

縄文時代の後に遺構、遺物の量が多くなるのは平安時代で、その間の人間の活動の痕跡は極めて希薄である。弥生時代の遺物は栄山(3)遺跡や岩渡小谷(2)遺跡で土器片が出土している程度であり、それに続く時期も不明な点が多いが、本遺跡の南東方1.5kmの細越館遺跡からは５世紀のものと推定される土師器が出土していることが注目される。県内における土師器使用の初源を考える上でも貴重な資料と思われる。

平安時代には一転して遺跡が増え、近野遺跡から三内丸山遺跡にかけての一帯は比較的大規模な集落を形成していたようである。その南方約１kmの安田(2)遺跡からも多数の住居跡が検出されている。平安時代の集落は低位段丘、中位段丘面上だけではなく、岩渡小谷(2)遺跡、朝日山(3)遺跡など丘陵地にまで展開している。竪穴住居の構築材が確認された遺跡も注目される。細越遺跡や三内遺跡では壁材等が、岩渡小谷(2)遺跡では柱材が出土しており、当時の建築技術を知る上で興味深い。また、外周溝と掘立柱建物跡が伴う住居跡も三内丸山遺跡、岩渡小谷遺跡、朝日山(3)遺跡等の遺跡で確認されている。朝日山地区には他にもいくつか平安時代の遺跡が確認されているが、朝日山(2)遺跡の平成12年度の調査では、唐式鏡「伯牙弾琴鏡」が出土した。集落跡からの出土は類例がなく、この地域における平安時代の集落の性格を考える上で興味深い。

（太田原　潤）

表１　周辺の遺跡

番号	遺跡名		時期	報告書名等	刊行年	引用等	シリーズ	著者または発行者
1	近野	安田字近野	縄文(前～晩)、平安	近野遺跡(1)発掘調査報告書	1974	○	県12集	青森県教育委員会
				近野遺跡発掘調査報告書(II)	1975	○	県22集	青森県教育委員会
				近野遺跡発掘調査報告書(III)・三内丸山	1977	○	県33集	青森県教育委員会
				近野遺跡発掘調査報告書(IV)	1979	○	県47集	青森県教育委員会
				近野遺跡V	1997	○	県216集	青森県教育委員会
				市内遺跡発掘調査報告書	2001	○	市59集	青森市教育委員会
				近野遺跡VI(本書)	2002		県315集	青森県教育委員会
2	三内重層	三内字平山	縄文(前・中)	三内重層遺跡調査概報	1962		市１集	青森市教育委員会
3	三内沢部(1)	三内字沢部	縄文(早～後)、平安	三内沢部遺跡発掘調査報告書	1978	○	県41集	青森県教育委員会
4	小一内	三内字丸山	縄文(前～後)、平安	小三内遺跡発掘調査報告書	1994	○	市22集	青森市教育委員会
				三内丸山(2)・小一内遺跡発掘調査報告書	1994	○	市23集	青森市教育委員会
5	三内丸山	三内字丸山	縄文(前～後)、平安	三内丸山遺跡調査概報	1970	○	市４集	青森市教育委員会
				近野遺跡発掘調査報告書(III)・三内丸山	1977	○	県33集	青森県教育委員会
				近野遺跡発掘調査報告書(IV)	1979	○	県47集	青森県教育委員会
				三内丸山１遺跡発掘調査概報	1988	○	市15集	青森市教育委員会
				三内丸山(2)遺跡発掘調査概報	1993	○	市18集	青森市教育委員会
				三内丸山(2)・小一内遺跡発掘調査報告書	1994	○	市23集	青森市教育委員会
				三内丸山(2)遺跡II	1994	○	県157集	青森県教育委員会
				三内丸山(2)遺跡III	1994	○	県166集	青森県教育委員会
				三内丸山(2)遺跡IV	1995	○	県185集	青森県教育委員会
				三内丸山(2)遺跡発掘調査報告書	1996	○	市28集	青森市教育委員会
				三内丸山遺跡V	1996	○	県204集	青森県教育委員会
				三内丸山遺跡VI	1996	○	県205集	青森県教育委員会
				三内丸山遺跡VII	1997	○	県229集	青森県教育委員会
				三内丸山遺跡VIII	1997	○	県230集	青森県教育委員会
				三内丸山遺跡IX	1998	○	県249集	青森県教育委員会

表１　周辺の遺跡（続き）

番号	遺跡名		時期	報告書名等	刊行年	引用等	シリーズ	著者または発行者
5	三内丸山	三内字丸山	縄文(前～後)、平安	三内丸山遺跡Ⅹ	1998	○	県250集	青森県教育委員会
				三内丸山遺跡Ⅰ	1998	○	県251集	青森県教育委員会
				三内丸山遺跡Ⅱ	1998	○	県252集	青森県教育委員会
				三内丸山遺跡Ⅲ	1999	○	県263集	青森県教育委員会
				三内丸山遺跡Ⅳ	2000	○	県282集	青森県教育委員会
				三内丸山遺跡Ⅴ	2000	○	県283集	青森県教育委員会
				三内丸山遺跡Ⅵ	2000	○	県288集	青森県教育委員会
				三内丸山遺跡Ⅶ	2000	○	県289集	青森県教育委員会
				三内丸山遺跡Ⅷ	2001	○	県309集	青森県教育委員会
6	三内	三内字丸山	縄文(前～後)、平安	青森山・三内遺跡	1978	○	県37集	青森県教育委員会
7	岩渡小谷(2)	岩渡字小谷	縄文(前～後)、平安	岩渡小谷(2)遺跡	2001	○	県300集	青森県教育委員会
8	岩渡小谷(1)	岩渡字小谷	縄文・平安					
9	岩渡小谷(3)	岩渡字小谷	縄文(中)	12年度県埋蔵文化財発掘調査報告会資料	2000			青森県埋文センター
10	岩渡小谷(4)	岩渡字小谷	縄文(前～後)	13年度県埋蔵文化財発掘調査報告会資料	2001			青森県埋文センター
11	熊沢	岩渡字熊沢	縄文(早～後)	熊沢遺跡	1978	○	県38集	青森県教育委員会
				熊沢遺跡	2000	○	市48集	青森市教育委員会
12	三内丸山(5)	三内字丸山	縄文(中・後)	三内丸山(5)遺跡	1999	○	県269集	青森県教育委員会
13	三内丸山(3)	三内字丸山	平安					
14	三内丸山(4)	三内字丸山	縄文(前・中)、平安					
15	三内丸山(6)	三内字丸山	縄文(中・後)	三内丸山(6)遺跡Ⅰ	1999	○	県257集	青森県教育委員会
				三内丸山(6)遺跡Ⅱ	2000	○	県279集	青森県教育委員会
				三内丸山(6)遺跡Ⅲ	2001	○	県307集	青森県教育委員会
				三内丸山(6)遺跡Ⅳ	2002		県327集	青森県教育委員会
16	安田(2)	安田字近野	縄文(前・後)、弥生、平安	安田(2)遺跡	1999	○	県255集	青森県教育委員会
				安田(2)遺跡Ⅱ	2001	○	県303集	青森県教育委員会
				安田(2)遺跡Ⅲ	2002		県321集	青森県教育委員会
17	安田(1)	安田字近野	縄文(後)					
18	安田近野(1)	安田字近野	縄文(後～後)、平安					
19	柴山(3)	雛越字柴山	縄文、弥生、平安	柴山(3)遺跡	2001	○	県294集	青森県教育委員会
20	縄越館	雛越字柴山	平安	「津軽半島における擦文土器の新資料」	1971	○		北林八洲晴
21	柴山(4)	雛越字柴山	平安					
22	柴山(1)	雛越字柴山	平安					
23	柴山(2)	雛越字柴山	縄文、平安					
24	朝日山(2)	高田字朝日山	縄文、平安	朝日山遺跡Ⅱ	1993		県152集	青森県教育委員会
				朝日山遺跡Ⅲ	1994		県156集	青森県教育委員会
				朝日山(2)遺跡	2001		県298集	青森県教育委員会
				朝日山(2)遺跡Ⅲ	2002		県316集	青森県教育委員会
				朝日山(2)遺跡Ⅳ	2002		県324集	青森県教育委員会
				朝日山(2)遺跡Ⅴ	2002		県225集	青森県教育委員会
25	朝日山(3)	高田字朝日山	縄文、平安	朝日山遺跡Ⅱ	1993		県152集	青森県教育委員会
				朝日山遺跡Ⅲ	1994		県156集	青森県教育委員会
				朝日山(3)遺跡	1995		県167集	青森県教育委員会
				朝日山(3)遺跡	1997		県215集	青森県教育委員会
26	朝日山	高田字朝日山	縄文、平安、中世	朝日山遺跡	1984		県87集	青森県教育委員会
				朝日山遺跡Ⅱ	1993		県152集	青森県教育委員会
				朝日山遺跡Ⅲ	1994		県156集	青森県教育委員会
27	雛越	雛越字種元	縄文(晩)、平安	雛越遺跡	1979		県49集	青森県教育委員会
28	浪館(2)	浪館字平岡	縄文(中・後)					
29	浪館(1)	二内字丸山	縄文(前)					
30	三内沢部	三内字沢部	縄文(中)					
31	三内沢部	三内字沢部	縄文、平安	市内遺跡詳細分布調査報告書	1995		市25集	青森市教育委員会
32	三内沢部	二内字沢部	平安	市内遺跡詳細分布調査報告書	1995		市25集	青森市教育委員会
33	江渡	石江字江渡	縄文(晩)					
34	石江	石江字平山	縄文(前)					
35	新城平岡	新城字平岡	平安	市内遺跡詳細分布調査報告書	1995		市25集	青森市教育委員会
36	新城平岡	新城字平岡	縄文(後)、平安					
37	西高校	新城字平岡	弥生、平安					
38	西バイパス	新城字平岡	縄文(前・後)、平安					
39	高岡(1)	石江字高岡	縄文(前)					
40	高岡(2)	石江字高岡	縄文(前・後)					
41	高岡(3)	石江字高岡	縄文(後)、平安					
42	高岡(4)	石江字高岡	縄文(前・後)					
43	高岡(5)	石江字高岡	縄文(前・後)					
44	高岡(6)	石江字高岡	縄文、平安					
45	岡部	石江字岡部	縄文					

引用等の欄に○印を付したものは本報告書における引用・参考文献

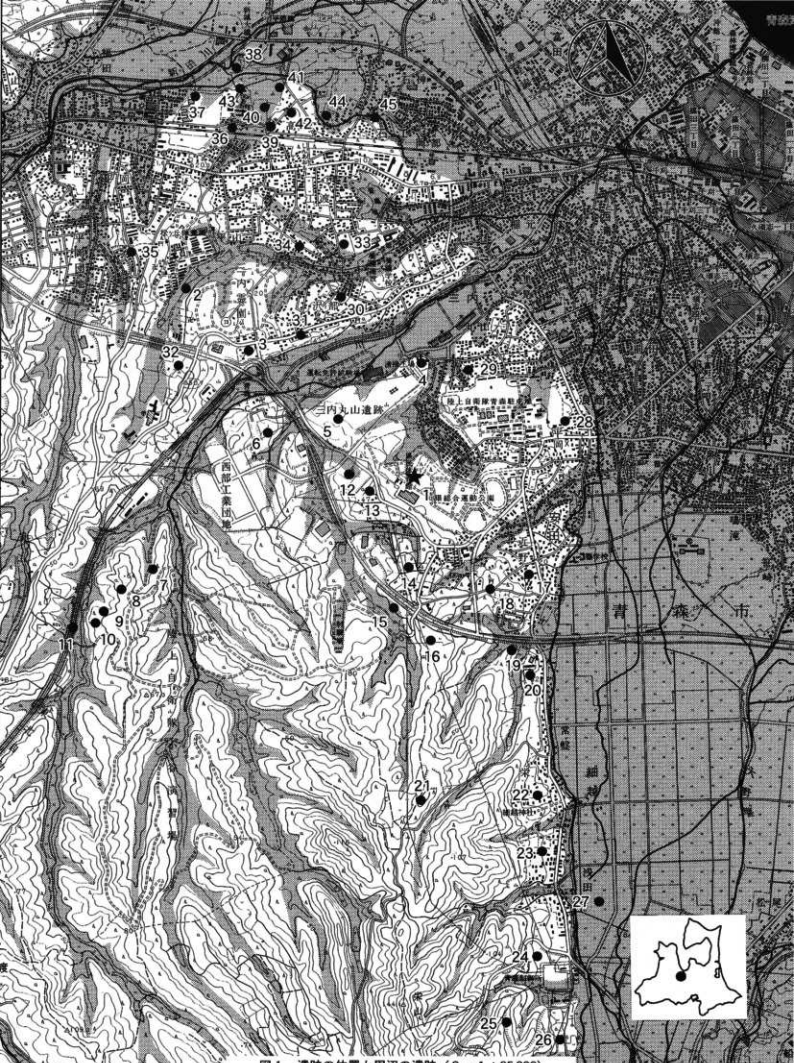
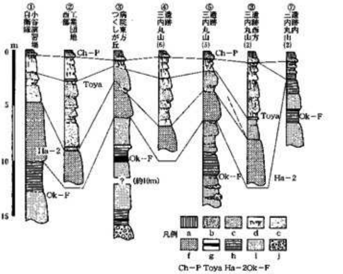


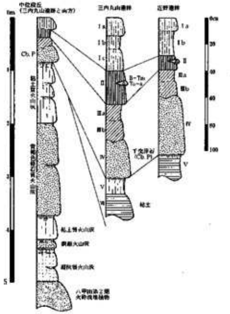
図1　遺跡の位置と周辺の遺跡（S＝1：25,000）

網かけ部は谷及び低地。谷と河川は大正5年発行5万分の1地形図を元に作図

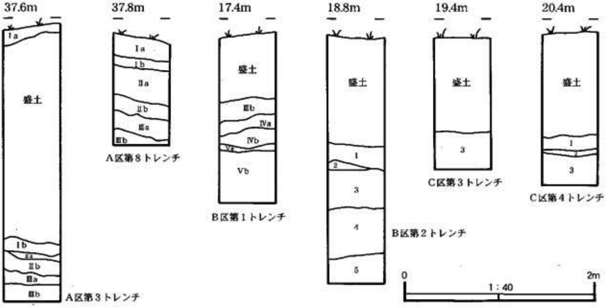


a：表土、b：降下細粒軽石層、c：崖錐堆積物、d：黄色褐色ロームとクラック帯、e：軽石質ローム
f：軽石質凝灰岩（火砕流堆積物）、g：泥炭層、h：粘土、i：成層砂、j：砂礫層
Ch-P：千曳浮石、Toya：洞爺テフラ、Ha-2：八甲田第2期火砕流堆積物、Ok-F：岡町層

山口義伸　1999（青森県埋蔵文化財調査報告書第257集）より転載



山口義伸　1997（青森県埋蔵文化財調査報告書第216集）より転載



基本土層

Ⅰ層　10ＹＲ3/2　黒褐色　公園整備のため整地されたと思われる層（Ⅰａ）及び整地前の耕作土と思われる層（Ⅰｂ）。

Ⅱ層　10ＹＲ1.7/1　黒色　全体的に腐植質でやや粘土質でもある。かたくて多少締まっている。軽石粒や粘土粒などの混入がきわめて少ない。本層上部には、白頭山起源の苫小牧火山灰（Ｂ－Ｔｍ）、下位に十和田ａ降下火山灰（Ｔｏ－ａ）の２枚の細粒火山灰を挟むことがある。いずれもレンズ状あるいは小ブロック状の堆積を示す。特に、平安時代の遺構との関係が密接である。

Ⅲ層　10ＹＲ3/4　暗褐色　漸移層である。粘性・湿性があり、かたさ及び締まりにやや欠けている。下位の第Ⅳ層の混入状況によって細分される。下位のⅢｂ層はブロック状の混入が目立ち全体的に軽石質である。上位のⅢａ層は軽石粒が多く混入し全体的に土壌化が進み色調が暗い。このⅢａ層は縄文時代前期の遺物包含層と思われる。

Ⅳ層　10ＹＲ5/8　黄褐色　暗黄灰色軽石質火山灰。一次的堆積を示す層位は緻密堅固なラピリ質火山灰で径２cm以下の軽石粒の混入が目立つ。千曳浮石（東北地方第四紀研究グループ、1969）及び寝ケ関浮石（山口、1993）に比定される。おそらく11,000～12,000年前の降下火山灰で十和田火山起源と推定される。下半部がより砂質が強くよくしまる場合は上位をⅣａ、下位をⅣｂとした。

Ｂ区第２トレンチ

１層	10ＹＲ2/2	黒褐色	整地され攪乱されたⅡ層土。
２層	10ＹＲ6/6	明黄褐色	整地され攪乱された３層土。
３層	10ＹＲ5/4	にぶい黄褐色	黄褐色粘土であるが、空気に触れるとより濃色になるようである。
４層	10ＹＲ5/3	にぶい黄褐色	比較的よくしまった黄褐色粘土であるが、下部は鉄分のためか赤みが強い。
５層	10ＹＲ5/6	黄褐色	４層に似るがマンガン粒？混入。

Ｃ区

１層	10ＹＲ1.7/1	黒色	Ⅱ層と同様であるがやや粘性が増す。
２層	10ＹＲ3/1	黒褐色	３層から１層への漸移層。
３層	10ＹＲ6/8	明黄褐色	乾燥すると酸化するためか明黄褐色粘土となるが、断面直後は灰オリーブ色（５Ｙ5/2）である。

図２　遺跡及び周辺の土層

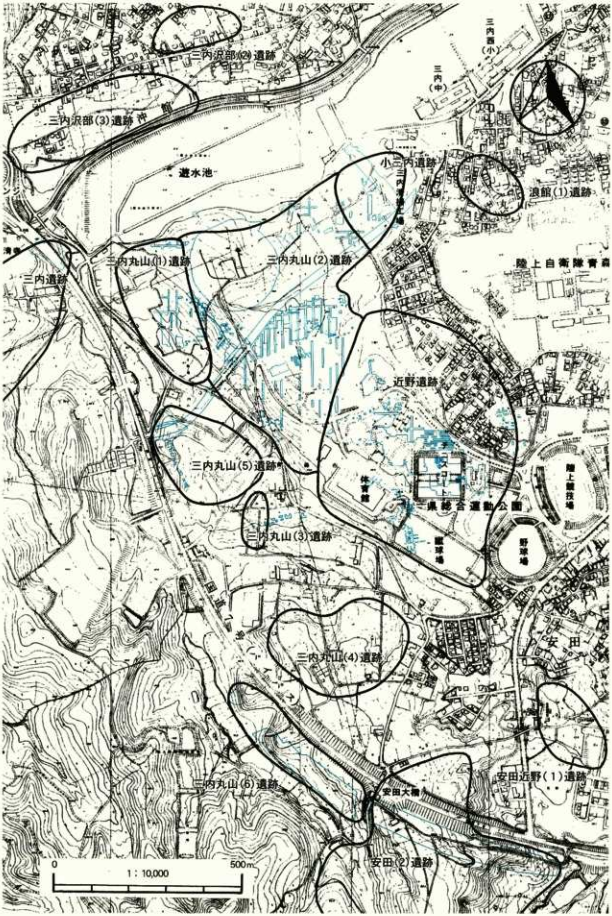


図3　近野遺跡周辺の調査（遺跡範囲及び調査区の位置は概略）

第２章　遺構と遺物

第１節　概要

近野遺跡はこれまでにもしばしば発掘調査が行われてきた（図３・４、表１参照）。主体となるのは、縄文時代中期、後期、平安時代であるが、中期の遺構・遺物は三内丸山遺跡隣接地の現遺跡広場付近中心、後期の遺構・遺物は現テニスコート付近中心に分布していた。平安時代の遺構・遺物は現テニスコートから花木園、沈床園にかけて分布していた。

今回調査をしたのはＡ区、Ｂ区、Ｃ区、Ｆ区であり、これまでの調査結果を参照すると主として平安時代の遺構・遺物の分布域に近いものと推定された。個別の概要は各区毎に述べるが、ここでは今年度の調査全体を通じた所見を記す。

検出された遺構は竪穴住居跡５軒（掘立柱建物跡付随のものを含む）、円形周溝１基、溝跡５条、土坑６基である。土坑１基が縄文時代で、他は平安時代のものと推定される。その内溝跡１条と掘立柱建物跡は竪穴住居跡に付随するものである。これらのうち、調査区内で全体が検出された円形周溝２基、溝跡１条、土坑６基は精査を終了したが、他は確認のみに留めた。確認のみに留めたのは構造物、立木等で全体が検出できなかったものであり、今年度の調査は構造物を壊さないという制限によるものである。

出土遺物は平安時代の土器・木製品、縄文時代の土器、石器等である。平安時代の遺物は土師器、須恵器の甕、坏の破片、木製品等が確認されている。木製品が出土したのはＦ区の低湿地部で、白頭山・苫小牧火山灰の下位である。箸、曲げ物の破片が多い。

縄文時代の遺物は時期的には後期の土器が主体であるが、主にＢ区から出土したものである。Ｂ区の土坑はこれまで検出された近野遺跡の後期の遺構としては西限付近に位置するものと思われたが、2001年度の発掘調査ではさらに西の中位段丘面上で後期の甕棺墓が確認された（2002年度報告予定）。

堆積土の遺存状況は全体的な傾向としてはあまりよくなく、表土以下が連続的に観察できる場所は限られていた。広範囲に土盛りされていたが、現況に土盛りしたところは少なく、土盛りに先立って黒色土を削平している部分が大半であった。特に、土盛りが厚かったのはＦ区の谷部分では、自然堆積土に達するまで最大８ｍ程度の盛り土を除去しなければならなかった。盛り土は脆弱なためしばしば大規模な崩落を起こし、その影響で断面図が作成できなかった個所も部分的にある。広域火山灰は白頭山・苫小牧火山灰が確認されたが、層として確認できたのは溝や土坑の堆積土中やＦ区の谷部分である。

図４　近野遺跡・三内丸山遺跡のこれまでの調査（調査区の位置は概略）

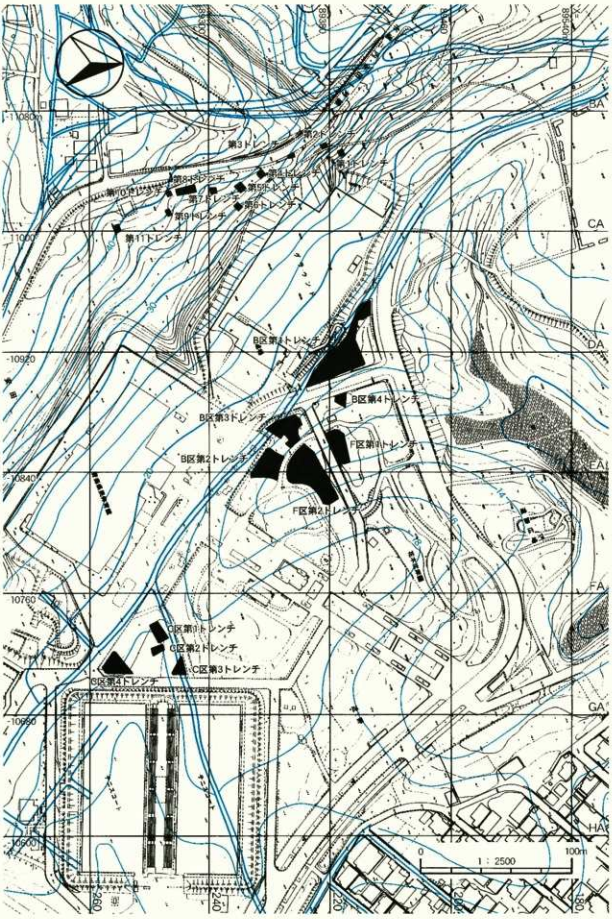


図5　2000年度の調査区（青色等高線は運動公園造成前の1972年時点のもの）

第２節　Ａ区の調査

今回トレンチを入れたのは中位段丘面と低位段丘面の境をなす段丘崖の傾斜地にほぼ相当する。傾斜地のためか堆積状況は必ずしも一様ではない。削平を受けている様子はあまり見受けられないが、一部土盛りされているようであり、第３トレンチではその厚さが２ｍ以上にも及ぶ。

11箇所のトレンチのうち、６個所で遺物が出土しているが、何れも小片で時期決定の決め手を欠くものが大半である。明確な遺構は確認されなかった。

第１トレンチでは１点の土器片が出土した。口縁部小片であるが、縄文時代前期のものと思われる。第３トレンチでは６点の縄文土器片が出土し、４点を図示した。必ずしも明確ではないが、前期から後期にかけてのものと思われる。第５トレンチでは１点の土器小片が出土した。細片であるが縄文土器と思われる。第６トレンチでは土器は出土していないが石器が２点出土している。第７トレンチでは土師器片が１点出土している。第８トレンチでは土器片が７点出土し、その内２点を図示した。縄文時代前期のものと思われる。

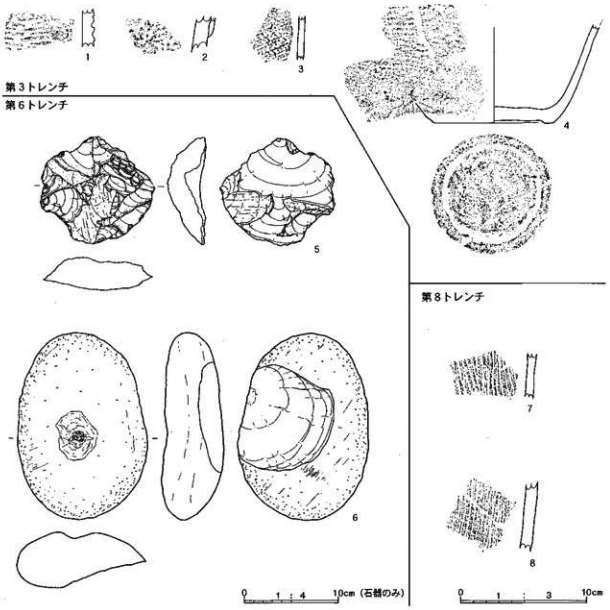


図６　Ａ区出土遺物

第3節　B区の調査

1　概要

調査したのは中位段丘の段丘崖の斜面を下り切った比較的平坦な面と、F区の谷に向けての緩い傾斜地付近である。堆積土の遺存状況は良好とは言いがたく、特に黒色土が広範囲にわたって削平されていた。林内を除いては、一旦黒色土を削平した後にあらためて別の土を盛って現況の面が作られていた。

第1トレンチで遺構が検出されている。検出された遺構は外周溝と掘立柱建物跡が付随する竪穴住居跡1棟、土坑5基、溝跡4条である。4条の溝跡のうち2条は竪穴住居に伴う外周溝の可能性が考えられる。時期的な内訳は、縄文時代後期に属するものが土坑1基、他は平安時代に属するものと思われる。土坑番号は第7号まで付してあったが、第6号土坑としたものは第5号溝跡に変更した。2000年度の調査区内では全体像がつかめず、土坑の可能性を考えて遺構名を付したのであるが、2001年度に隣接地を調査した結果、それが溝の先端にあたることが判明したための変更である。また、第7号土坑については遺構から除外した。なお、遺構番号は両年度連番で付してある。

2　縄文時代の遺構

B区第4号土坑

DA－215グリッド付近で確認されている。確認面の標高は約18.3mである。開口部はいびつな円形であるが、底面形態はダルマ形を呈する。底面は僅かに起伏があり、壁面は外傾して立ち上がった後、オーバーハング気味に内傾し、再び外傾する。北東隅に扁平礫が積み重ねられたような状態で検出された。堆積土は、人為堆積部と自然堆積部に分かれるようにも見える。9、10、11層等の土で土坑を一度埋め戻し、壁はきれいに出さないものの底面まで再び土坑を掘り返し、その後に1、3、4層等が自然堆積した可能性が考えられる。出土土器は縄文時代後期初頭十腰内Ⅰ式の範疇に属するものである。図14－1は欠損部も多いがほぼ器形がわかる深鉢、2は胴部が一部欠損するもののほぼ復元できる浅鉢であるが、それ以外は何れも破片である。4～6は口縁部、7～13は胴部、14～17は底部付近の破片である。1、14は4層の下底付近から、他は1、3、5層で検出された。従って、これらの土器はこの土坑の一次的な利用に伴ったものではなく、最終段階の埋没過程で土坑内に入ったものと思われる。土器の他に4点の礫も出土しているが、部分的に擦痕があるようにも見え、石皿的に利用されたものである可能性も考えられる。また、図中網かけ部にはタール状の付着物が観察される。出土層位は7層中であるが、土坑底面から積み重なった状態で出土しているので、土器とは異なりこの土坑の一次的な利用に関連したものである可能性が高いものと思われる。微視的に見ると土坑が構築され、放棄に至るまでの間に数段階の過程が読みとれ、それに対応して遺物が埋没した段階にも微妙な時間差があったものと推定されるが、周辺の遺構・遺物の分布状況等から判断すると、その差が大きなものであったとは考えがたい。いずれにしろこの土坑が構築、使用されたのは縄文時代後期初頭と思われる。

なお、2001年度の調査で、A区において後期初頭の甕棺墓が確認された。現段階では十分な検討材料が揃っていないが、本土坑の構築、埋め戻し、掘り返し、埋積の過程がそれら甕棺墓に何らかの形で関係する可能性についても考慮する必要があるかもしれない。

3　平安時代の遺構

Ｂ区第１号竪穴住居跡

ＣＯ－215グリッド付近で確認されている。確認面の標高は約18.8mである。大半が現道路下にかかっていたため今年度は確認のみに留め、精査は行わなかったが、外周溝と掘立柱建物が付随することは確認できた。また、外周溝には白頭山・苫小牧火山灰と思われる火山灰の堆積が確認できることから、住居の構築はその堆積以前のものと思われる。

なお、図中に硬化面と表示した範囲は道路状遺構の可能性も考えられるが、確認できた範囲が限られるため明言はできない。切り合い関係から判断すると外周溝よりは古期になるようである。

Ｂ区第１号土坑

ＤＡ－216グリッドで確認されている。確認面の標高は約18.3mである。浅い皿状の土坑で平面形は隅丸方形を呈する。底面は比較的平坦で壁は僅かに外傾して立ち上がる。遺物は出土していないが、覆土等から平安時代の可能性が考えられる。

Ｂ区第２号土坑

ＤＡ－216グリッドで確認されている。確認面の標高は約18.2mである。擂鉢状の土坑で平面形は不整な楕円形である。壁は凹面状の底面から緩く外傾して立ち上がる。第５号土坑と接するが新旧関係は不明瞭である。2001年度の発掘調査において隣接地で住居の外周溝と思われる溝跡（第５号溝跡）が確認された。外周溝の先端にはしばしば土器片の入った土坑が付随するが、位置関係や遺物の出土状況から判断して、本土坑は第５号溝跡に伴うものである可能性が考えられる。土師器甕の胴部片が出土している。

Ｂ区第３号土坑

ＣＴ－216グリッドで確認されている。確認面の標高は約18.3mである。ほぼ楕円形の土坑で、底面には若干の起伏がある。

Ｂ区第５号土坑

不整形の土坑で、第５号土坑、第２号溝跡と重複する。2001年度の発掘調査において隣接地で住居の外周溝と思われる溝跡（第５号溝跡）が確認されたが、2000年度の調査時点ではその存在が把握できなかったのでそれぞれの関係は必ずしも明確ではないが、本土坑は第２号土坑同様、第５号溝跡に伴うものである可能性が考えられる。遺物は第２号土坑出土のものと同一個体と思われる土師器片が出土している。

Ｂ区第１号溝跡

ＤＣ－220からＤＦ－219グリッドにかけて確認されている。確認面の標高は約18.3mである。調査区内を東西方向に横切るが、部分的に攪乱を受けている。2001年度の周辺の調査でこの溝は東側の現道路下を横切り、ところどころで屈曲しながらＦ区の谷に沿うように延伸することがわかった。第４トレンチで確認された溝（図７参照）も同一の溝であることが明らかになった。全体像は次年度の報告書に譲ることとし、本報告書では第1トレンチ部分について図示した。

Ｂ区第２号溝跡

ＣＴ－216グリッド付近で確認されている。確認面での標高は約18.4mである。ほぼ方形に巡るが、北西角部分は開口する。第５号土坑、第５号溝跡と重複する。第５号溝跡は2001年度の調査で確認さ

れたもので住居の外周溝と推定される。2000年度の調査ではその存在を明確に把握できなかったが、土層の堆積状況から判断すると図10D断面の2、3層が本溝跡、5、6層が第5号溝跡に対応すると考えられることから、本溝跡の方が新しいものと思われる。小形の土師器甕の底部が出土している。

B区第3溝跡

DC－214グリッドで確認されている。確認面の標高は約17.6mである。調査区の北東角で確認されており、両端は2000年度の調査区域外に延伸していた。2001年度の調査で全貌が検出され、住居の外周溝であることが判明したので、詳細は次年度に報告することとし、本報告書で第1トレンチ部分のみ図示する。

B区第5号溝跡

DB－214グリッドで確認されている。確認面の標高は約17.8mである。2000年度の調査時点では全体が検出できなかったものの土坑の一部である可能性を考えて第6号土坑の名称を付したが、翌年隣接地を調査した結果、住居の外周溝と思われる溝の先端であることが判明したため、今回の報告では土坑番号を抹消し、第5号溝跡とした。全体からみると2000年度に検出できたのはごく一部であるので、2001年度分の報告書であらためて報告することとする。

4 遺構外出土遺物

土器（図17～18）

土器の出土量は少なく、器形が復元できるものもないが、時期的には縄文時代前期、中期、後期のものが出土している。分類上3群に大別し、縄文時代前期を第Ⅰ群、中期を第Ⅱ群、後期を第Ⅲ群とした。

第Ⅰ群土器（25～33）

小片のみなのであえて細別しなかったが、円筒下層式期のものと思われる。胎土に繊維が含まれるのが特徴的である。

第Ⅱ群土器（34～49）

口縁部の破片が2点あるもののいずれも小片のみである。円筒上層式期から最花式期頃までのものが含まれる。縄文のみの破片は時期決定の決め手を欠くものが大半であるが、胎土の特徴等からさしあたり本群に含めた。

第Ⅲ群土器（50～88）

復元できる個体はないが、口縁部の破片は14点出土している。器形、文様にバラエティーはあるが、いずれにしろ十腰内Ⅰ式の範疇に含まれるものと思われる。第4号土坑周辺の他にDC－220付近にも比較的集中するが（63～70）、これらは同一個体の可能性が高い。

石器（図18～19）

敲き石、磨製石斧、石鏃、石匙等が検出されているが、トランシェ用石器が注目される。基部側を欠損しているものの、刃部のあり方等は典型的なトランシェ用石器の特徴をよく留めている。他の石器は帰属時期が不明確であるが、この石器は早期の土器群に伴うのが一般的である。今回の調査で早期の土器は確認されていないが、過去の調査では少ない量ながらも早期の土器が出土しているので、そうした資料に関連する可能性も考えられる。他に剥片類も出土しているが、使用の痕跡があるものを図示した。

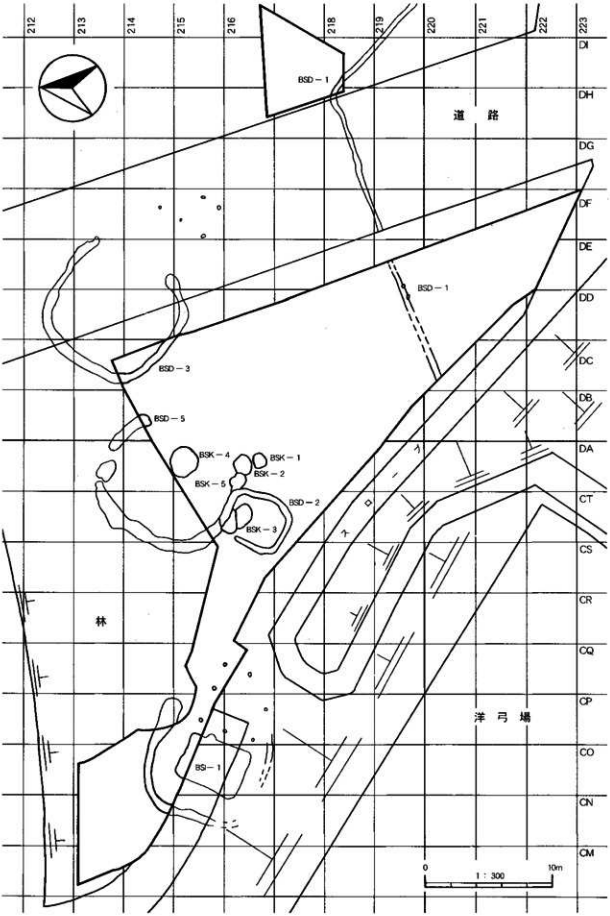
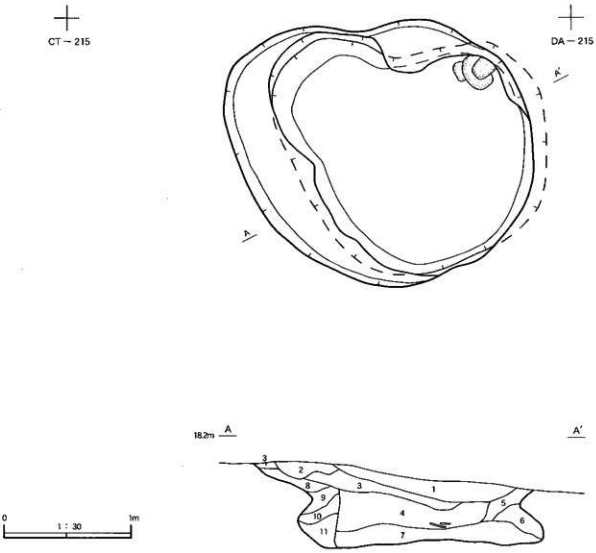

212
213
214
215
216
218
219
220
221
222
223
DI
DH
DG
DF
DE
DD
DC
DB
DA
CT
CS
CR
CQ
CP
CO
CN
CM
BSD－1
道　路
BSD－1
BSD－3
BSD－5
BSK－4
BSK－1
BSK－2
BSK－5
BSD－2
BSK－3
林
洋　弓　場
BS－1
0
1：300
10m

図7　B区遺構配置図



SK－4

1層	10YR2/1	黒　色	黒色土主体、ローム粒5％、炭化物粒5％、焼土粒5％含む。
2層	7.5YR4/4	にぶい褐色	にぶい褐色土主体、黒色土粒20％、ローム粒5％未満、炭化物粒5％未満、焼土粒5％未満含む。比較的堅い。
3層	10YR2/2	黒 褐 色	黒色土主体、ローム粒10％、ローム中粒5％、炭化物粒5％含む。
4層	10YR1.7/1	黒　色	黒色土主体、ローム粒5％未満、炭化物中粒5％、下層面に十層混入。比較的よくしまる。
5層	10YR3/2	黒 褐 色	黒色土主体、ローム粒20％、ローム中・大粒10％、炭化物粒5％未満含む。
6層	10YR3/4	暗 褐 色	黒色土主体、ローム粒30％、ローム中・大粒20％、炭化物粒5％含む。しまりが悪く崩れやすい。
7層	10YR2/3	黒 褐 色	黒色土主体、ローム粒20％、炭化物粒・中粒30％含む。
8層	10YR2/3	黒 褐 色	黒色土主体、ローム粒40％、ローム中粒10％含む。しまりはよくない。
9層	10YR4/3	にぶい黄褐	黄褐色ローム主体、黒色土10％混入。しまりはよくない。
10層	10YR2/2	黒 褐 色	黒色土主体、ローム粒・中粒20％、炭化物粒10％混入。
11層	10YR4/4	褐　色	黒色土主体、ローム粒～大粒30％、ローム塊～大塊20％混入。

図8　B区第4号土坑

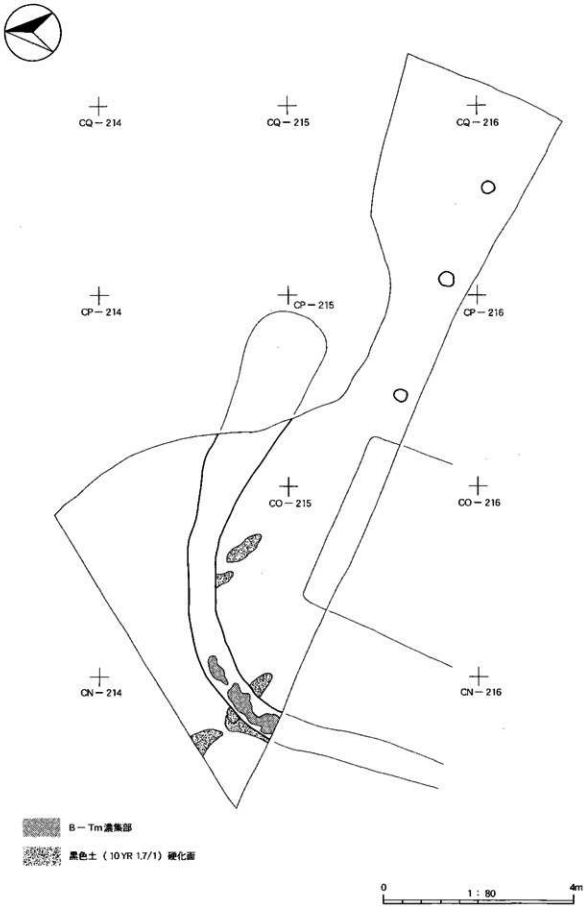
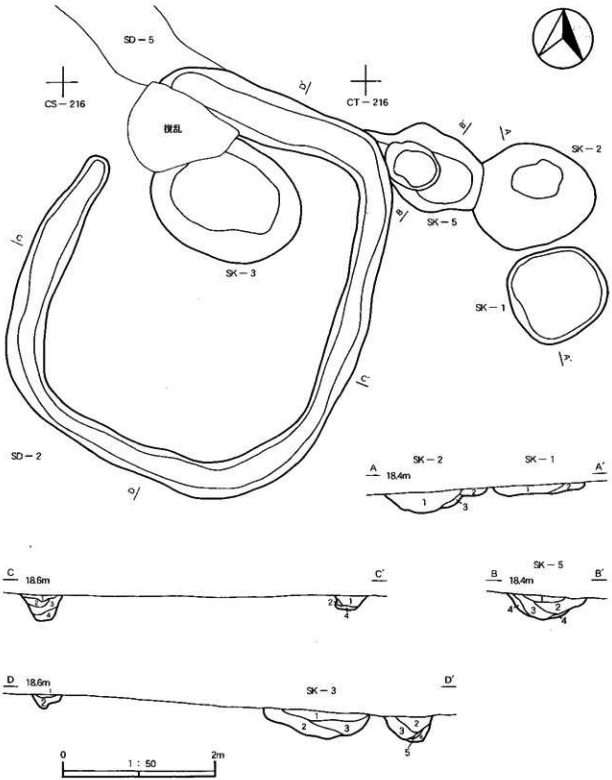


図9　B区第1号竪穴住居跡



SD－2
1層　10YR2/1　黒　色　黒色土主体、ローム粒10%混入。
2層　10YR2/2　黒 褐 色　黒色土主体、ローム粒20%、ローム中粒10%混入。
3層　10YR5/3　黒 褐 色　黒色土主体、ローム粒30%混入。
4層　10YR2/2　黒 褐 色　黒色土主体、ローム粒30%、ローム中粒10%混入。
5層　10YR3/6　暗 褐 色　黒色土主体、ローム粒40%、ローム中・大粒10%混入。
6層　10YR2/2　黒 褐 色　黒色土主体、ローム粒10%、中粒10%混入。

SK－1
1層　10YR2/1　黒　色　黒色土にローム粒20%、炭化物粒５%、焼土粒５%混入。
2層　10YR4/3　にぶい黄褐色　黒色土にローム粒30%、炭化物粒、焼土粒５%未満混入。

SK－2
1層　10YR2/1　黒　色　黒色土にローム粒10%、炭化物粒、焼土粒５%未満混入。
2層　10YR4/2　灰黄褐色　黒色土にローム粒20%、炭化物粒５%混入。
3層　10YR4/3　にぶい黄褐色　黒色土にローム粒30%混入。

SK－3
1層　10YR4/2　灰黄褐色　黒色土主体、ローム粒30%、ローム中・大粒10%、炭化物粒５%未満混入。
2層　10YR2/1　黒　色　黒色土主体、ローム粒10%混入。
3層　10YR2/3　黒 褐 色　黒色土主体、ローム粒20%混入。

SK－5
1層　10YR4/2　灰黄褐色　黒色土主体、ローム粒30%、ローム中・大粒10%、炭化物粒５%混入。
2層　10YR2/2　黒 褐 色　黒色土主体、ローム粒20%、ローム中粒10%、炭化物粒５%混入。土器を多く含む。
3層　10YR2/1　黒　色　黒色土主体、ローム粒10%、炭化物粒５%未満含む。土器を多く含む。
4層　10YR3/4　暗 褐 色　黒色土主体、ローム粒30%含む。

図10　Ｂ区第１～３・５号土坑、第２号溝跡

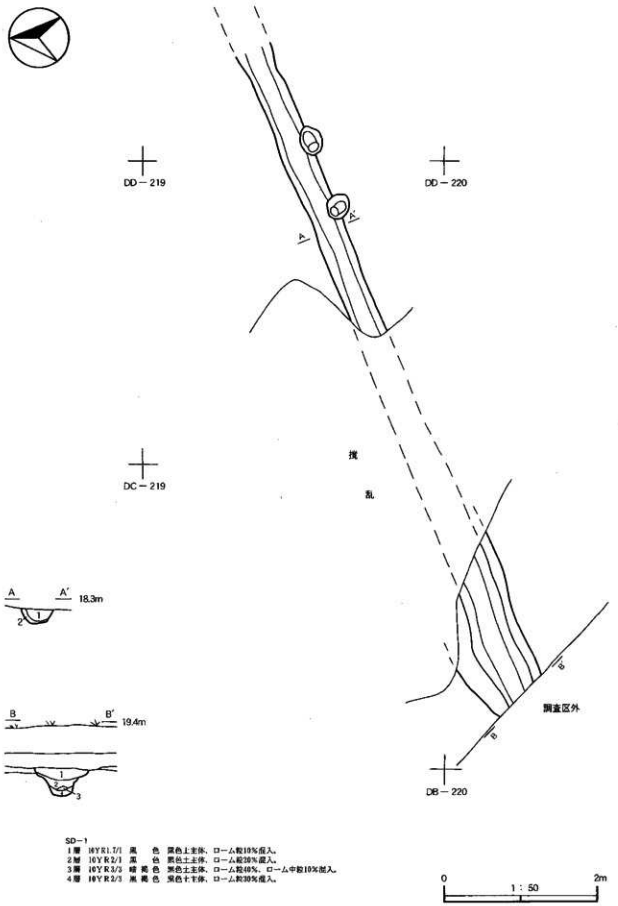

DD－219
DD－220
DC－219
DB－220
A
A'
B
B'
撹
乱
調査区外
A
A'
18.3m
2
1
B
B'
19.4m
1
3
SD－1
1層 10YR2.1/1 黒 色 黒色土主体、ローム粒10%混入。
2層 10YR2/1 黒 色 黒色土主体、ローム粒20%混入。
3層 10YR3/3 暗褐色 黒色土主体、ローム粒40%、ローム中粒10%混入。
4層 10YR2/3 黒褐色 黒色土主体、ローム粒30%混入。
0
1：50
2m

図11　B区第1号溝跡

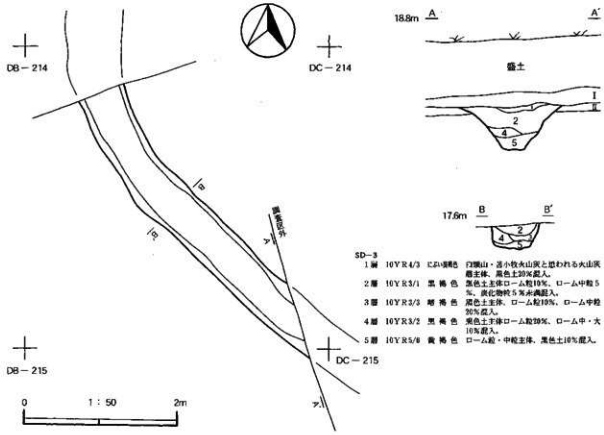


図12　B区第3号溝跡

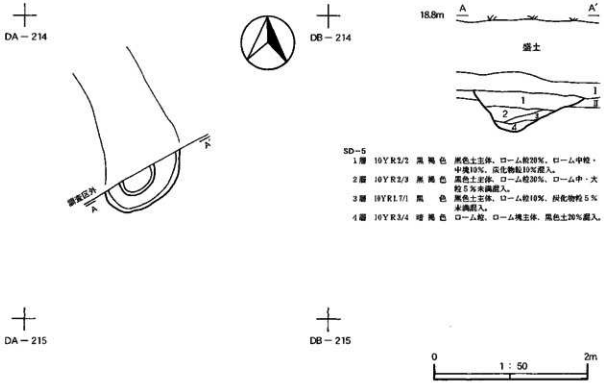


図13　B区第5号溝跡

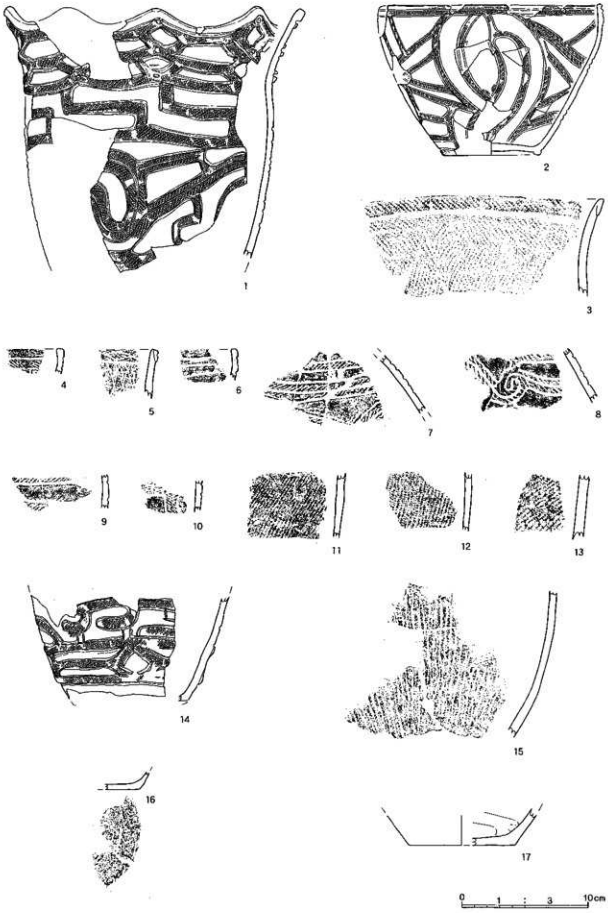


図14　B区遺構内出土遺物（第４号土坑－１）

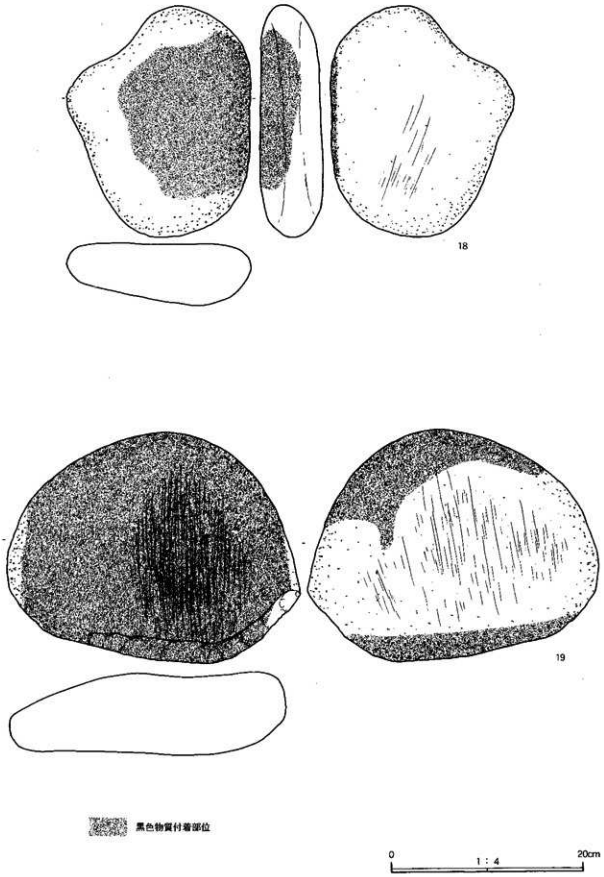


図15　B区遺構内出土遺物（第4号土坑－2）

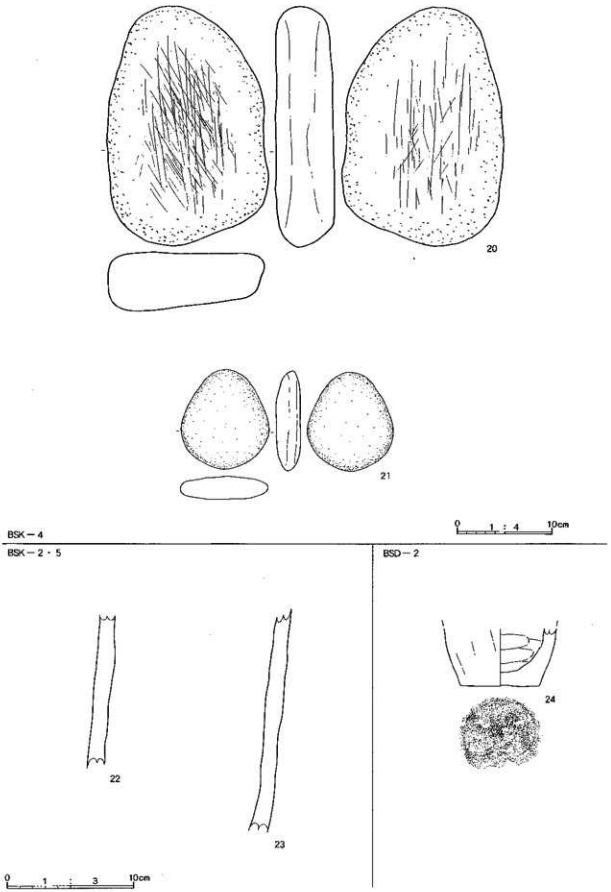


図16　B区遺構内出土遺物（第４号土坑－３、第２・５号土坑、第２号溝跡）

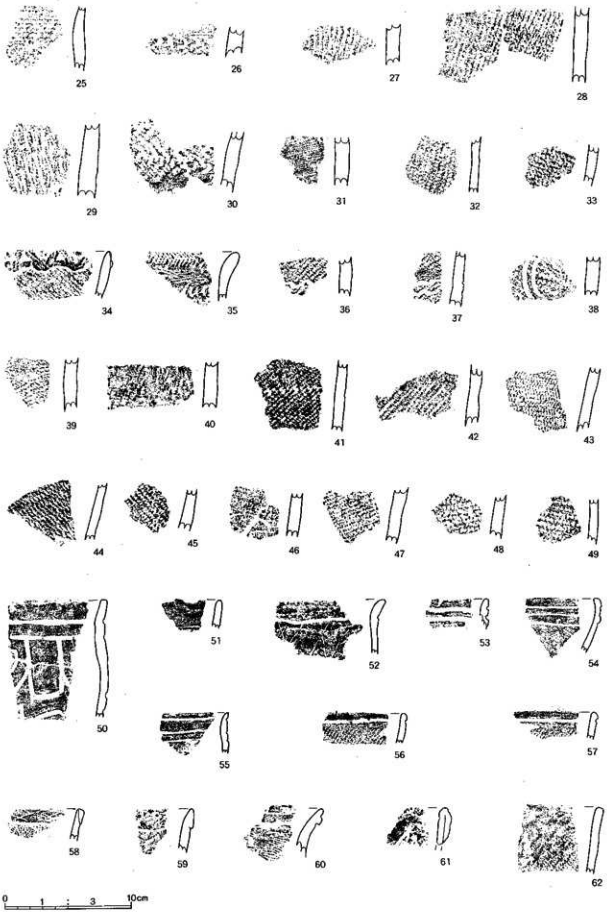


図17　B区遺構外出土遺物－1

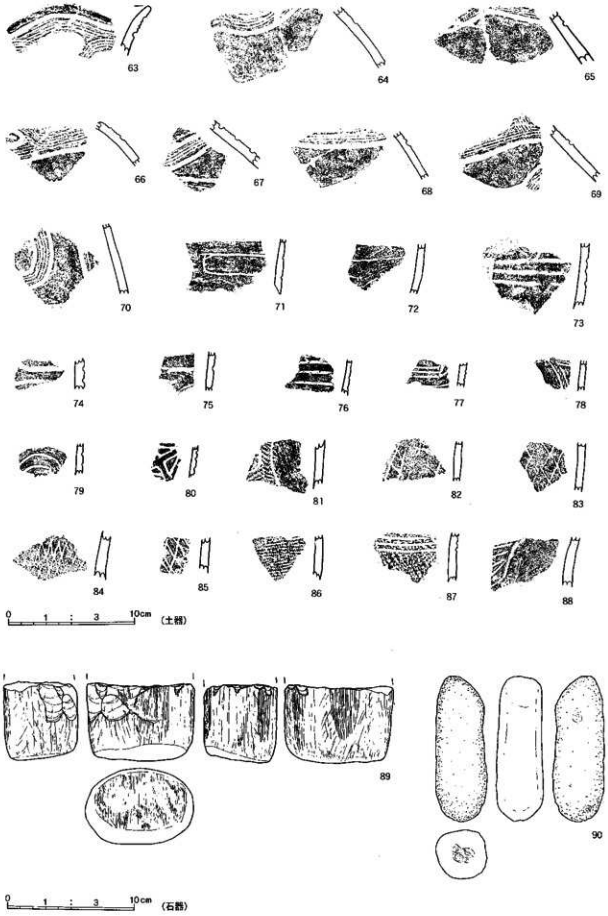


図18　B区遺構外出土遺物－2

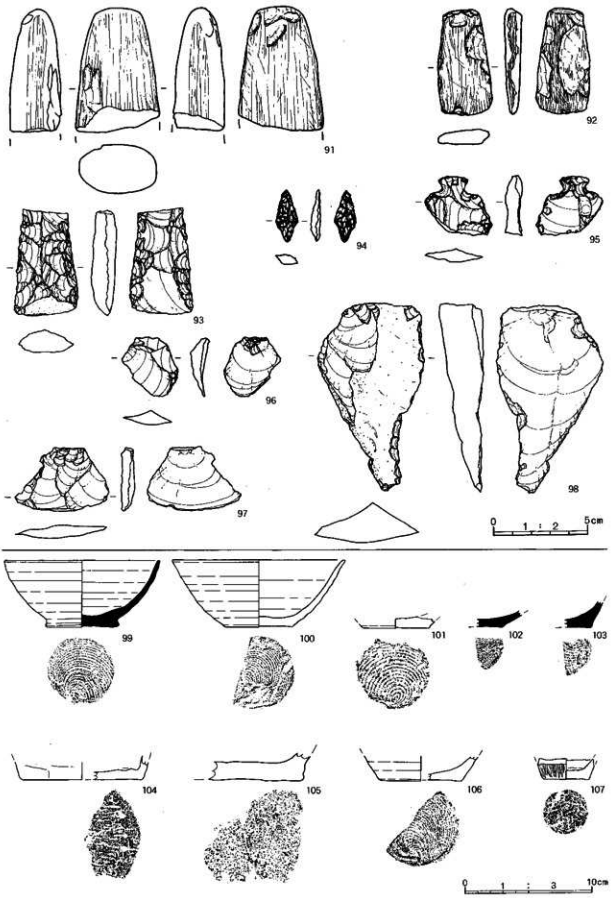


図19　B区遺構外出土遺物－3

第４節　Ｃ区の調査

１　概要

調査したのはＦ区の谷の谷頭付近の比較的平坦な場所である。調査時点ではＧ区と称していたが、第１章第２節に示したようにＣ区として規定し直した。４箇所のトレンチを入れたが（図５）、堆積土が比較的良好な状態で遺存していたのは杉林の内部のみで、その周辺の現芝生部分は黒色土削平後の盛り土が広範囲に及び（図２）、遺構・遺物が遺存している可能性は低い。遺構が確認できたのは杉林の内部の第１・第２トレンチであった。検出されたのは竪穴住居跡４棟、土坑１基、小ピット７基、溝跡１条である。小ピット以外は調査区内において遺構が完結せず、立木の伐採後に精査することとし、今年度は精査しなかった。正式な遺構番号は精査時点で付すこととし、ここでは仮番号で表記する。現杉林内は比較的高密度に平安時代の遺構が残されている可能性が考えられる。

２　検出遺構

Ｃ区仮第１号竪穴住居跡

第１トレンチ西側で確認され、南端が仮第３号竪穴住居跡北端に接する。全体は検出されていないが、住居の形態、散布する遺物から平安時代に帰属するものと推定される。

Ｃ区仮第２号竪穴住居跡

第１トレンチ西端で確認され、仮第３号竪穴住居跡と重複する。平面的な切り合い関係から判断して本住居跡の方が古期のものと推定されるが、平安期からは逸脱しないものと思われる。

Ｃ区仮第３号竪穴住居跡

第１トレンチ西端で確認され、仮第２号竪穴住居跡・仮第１号土坑と重複し、仮第１号竪穴住居跡と接する。前二者との関係においては本住居跡の方が新しいようであるが、後者との新旧関係は不詳である。今回のトレンチでは全体の約２／３ほどが検出されている。焼土や粘土の分布範囲から推定して、カマドの位置は東壁の南寄りと推定される。

Ｃ区仮第１号土坑

第３号竪穴住居跡の東壁中央付近に重複し、平面上は本土坑の方がより古期に見えるが、必ずしも明確ではない。

小ピット

小ピットは第１トレンチ内において７基検出されているが、今回のトレンチの範囲内においては配置に規則性などは見られない。周辺の本調査時にあらためて検討する必要がある。

Ｃ区仮第１号溝跡

第２トレンチ北東角で検出され、トレンチ外に延伸する。確認面付近で土師器甕等が出土した。

３　出土遺物（図21）

遺構は平安時代の坏・甕等の土師器片は第１トレンチ西側の住居跡付近に、縄文時代の遺物は第１トレンチほぼ中央付近に比較的まとまる傾向をみせる。

図21－５～18は縄文土器で５・６が前期、７～10が中期、他が後期のものと思われる。石器は剥片が１点出土している。19～23は土師器片で、19は甕口縁部、20～23は坏底部の破片である。

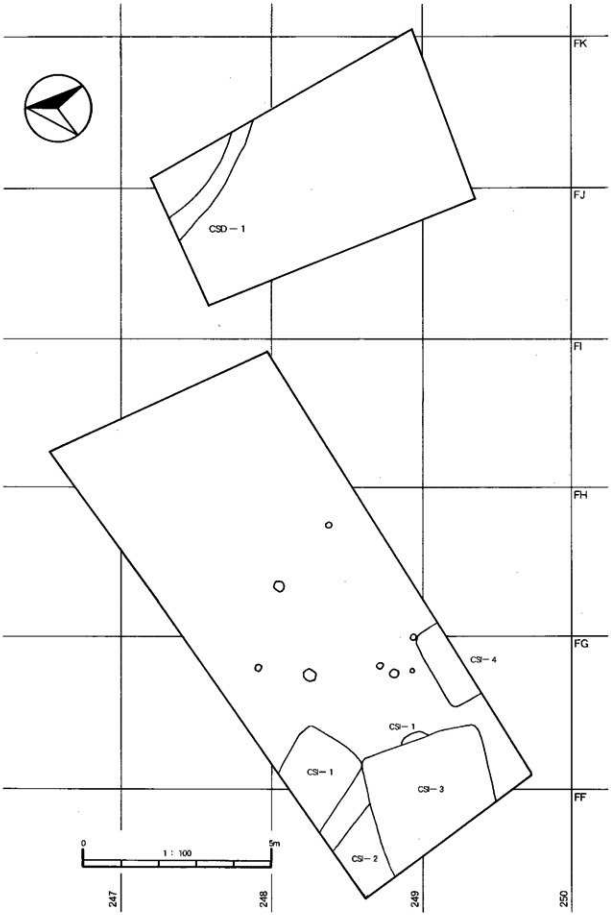

FK
FJ
FI
FH
FG
FF
CSD－1
CSI－4
CSI－1
CSI－1
CSI－3
CSI－2
0
1：100
5m
247
248
249
250

図20　C区遺構配置図

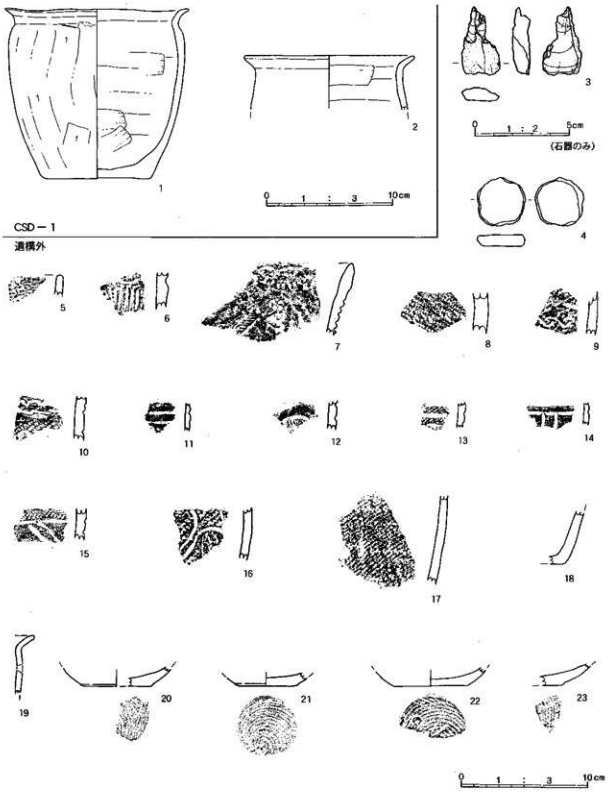


図21　C区出土遺物

第5節　F区の調査

1　概要

F区は沖館川に開口する谷の谷頭付近の底面及び底面へ向けての斜面である。この谷は現運動公園内の相撲場付近で二股に分岐し、西側への分岐は三内丸山遺跡の所謂「南の谷」に、南側への分岐は本調査区につながる。便宜上、前者を「三内丸山遺跡南の谷」、後者を「近野遺跡F区の谷」と仮称する。この二つの谷に挟まれた台地上（運動公園西駐車場）には、1977年報告分の三内丸山遺跡の発掘調査において2列の土坑墓列が確認されている。三内丸山遺跡南の谷と沖館川に挟まれた台地上には三内丸山遺跡の集落が立地し、公園として整備されつつある。それぞれの谷にはさらに小支谷が開析されるが、近野遺跡F区の谷は相撲場付近でさらに分岐し、その両者の谷に挟まれた台地上では1979年報告分の運動公園建設に先立つ近野遺跡の発掘調査において大形住居跡が確認されている（以上図3・4参照）。今回の調査区はこうした注目すべき遺構群が隣接する谷の谷頭付近にあたることになる。

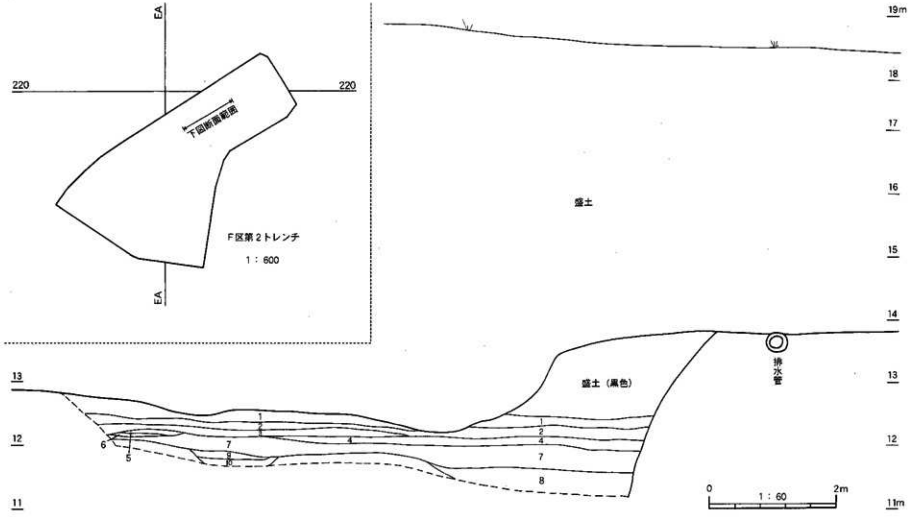
調査区は運動公園造成時の厚い盛り土で覆われていたが、黒色土等を削平した後の盛り土であるため、谷の底面付近以外では縄文時代以降の自然堆積土が失われており、遺構も確認できなかった。底面付近では湿地性の土が堆積しており、場所によっては白頭山・苫小牧火山灰も層状に確認できた。

今回報告にかかる2000年度の調査時点では、厚い盛り土のため谷の全体像が不明確であったが、2001年度の発掘調査で周辺を広く調査した結果、今回報告区域は谷の本筋ではなく、地すべり状の大規模な崩落部分にあたることがわかった。この谷は、縄文海進終了後の海退に伴う河川の下刻作用に連動して開析されたと考えられるが、洪水の繰り返しの痕跡と思われる（調査員山口義伸氏ご教示）砂の堆積も観察される。そうした洪水が各所に崩落を誘発したものと考えられるが、今回調査区部分の崩落は既に縄文時代に起きていたものと推定される。崩落部分はやがて湿地化し、白頭山・苫小牧火山灰が層状に堆積している。平安時代の遺物はそうした湿地部分の火山灰の下位から検出されている。同火山灰は谷の本筋部分では確認されないことから、崩落部分と本筋部分では離水期が異なっていたものと思われる。崩落部分は平安期には既に湿地化しており、水が流れにくかったため火山灰が堆積したが、本筋部分は火山灰が流失したものと思われる。その後本筋部分も流れが悪くなり湿地化が進んだようである。縄文時代の遺物は主として谷の本筋部分で確認されているが、数は少ない。

2　出土遺物（図23～図28）

縄文土器は小片のみで復元できるものはないが、2は口縁部、10・11は底部付近の破片である。2には隆線、3～6には沈線が見られるが、他は縄文のみである。前期と思われる1以外は中期後半の土器が大半である。平安時代の遺物も破片が主体であるが、13は完形に近い。器種的には土師器坏が多いが、土師器甕、須恵器坏の破片も散見される。木製品は箸が多数を占める。欠損品が大半で完形品は少ない。棒状の木製品の中には、用途不明であるが両側面に刻みをもつもの（78）、両端が焼け、中空のもの（79）、一端をつまみ状に加工したもの（80）、先端を比較的鋭く仕上げたものもある（81）。棒状の木製品に次いで目立つのは曲げ物であるが、側板の破片が主である。66は樹皮による接合部分である。77は曲げ物の底板状のものであるが、小形であり、側面に木釘と思われる丸棒がはめ込まれていること等から、柄杓の底板の可能性が考えられる。

（太田原　潤・赤羽真由美）



1層　10YR3/1　黒褐色　ローム粒20%、砂粒10%。
2層　10YR1.7/1　黒　色　植物繊維40%、炭炭質。全層中最も黒い。よくしまって、究沢がある。
3層　10YR3/3　暗褐色　植物繊維50%、炭炭質。
4層　10YR4/2　灰黄褐色　植物繊維40%、炭炭質。砂粒20%平安時代の遺物が出土する。
5層　10YR3/3　黒褐色　3層土にB-Tm40%。
6層　10YR5/3　にぶい黄褐色　B-Tm主体、黒色土粒10%。
7層　10YR2/1　黒色　植物繊維20%、炭化物粒10%。平安時代の遺物が出土する。
8層　10YR4/1　褐色　植物繊維、20%砂粒主体、黒色約20%。平安時代の遺物が出土する。
9層　10YR3/3　褐色　砂粒主体、黒色土粒40%。
10層　10YR2/1　黒色　植物繊維10%。
11層　10YR3/2　灰色　シルト質で斜面は青灰色、地山。

図22　F区土層断面

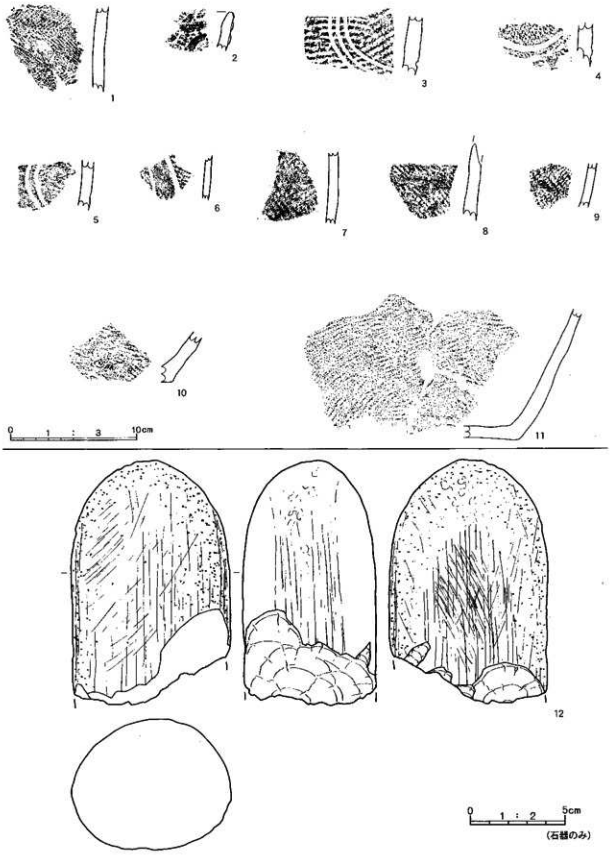


図23　F区出土遺物－1

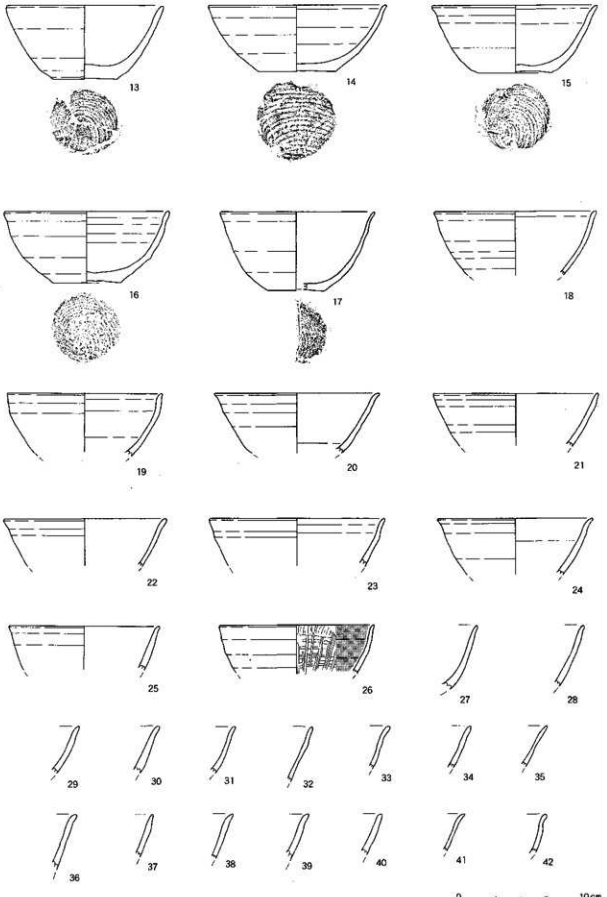

13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
0 1 : 3 10cm

図24　F区出土遺物－2

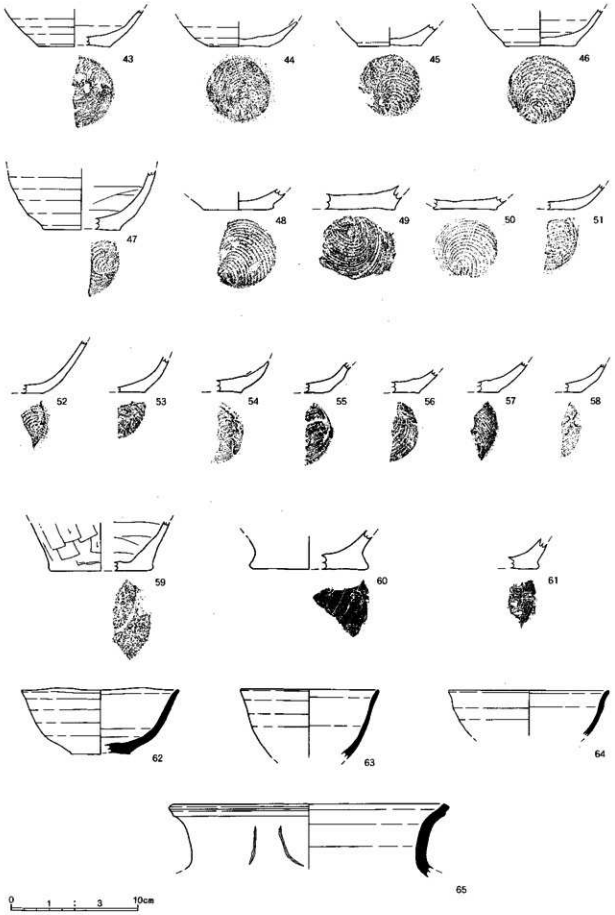

43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
0 1 3 10cm

図25　F区出土遺物－3

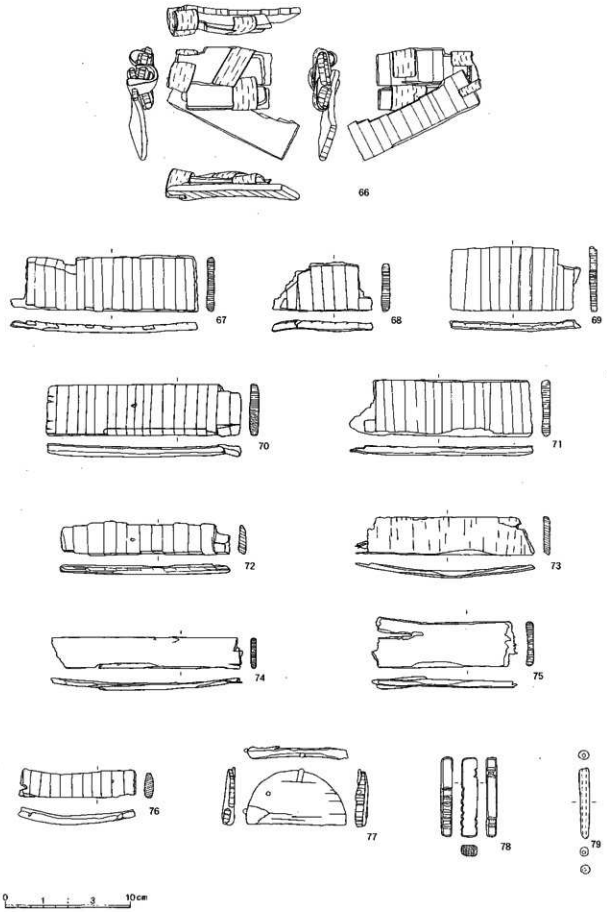


図26　F区出土遺物－4

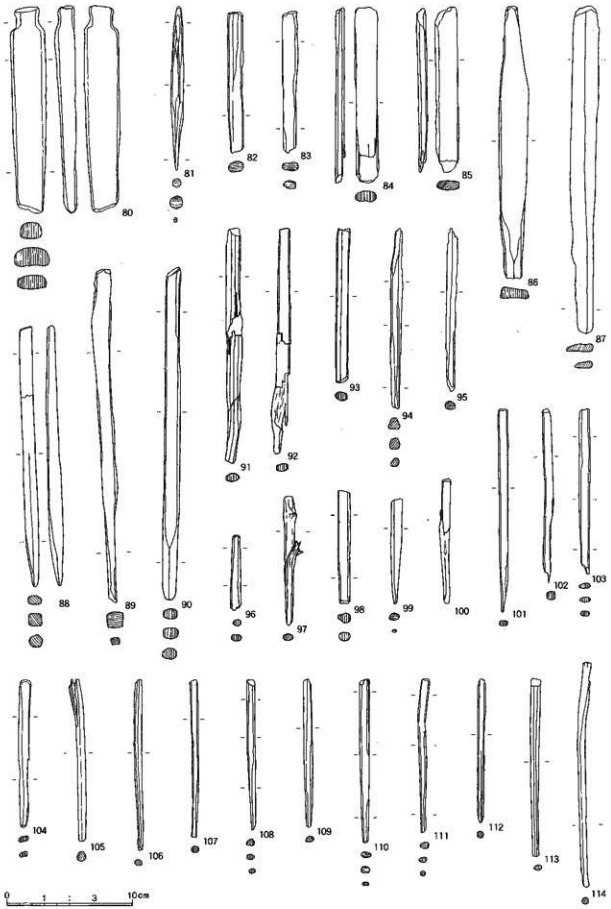

80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
0 1 3 10cm

図27　F区出土遺物－5

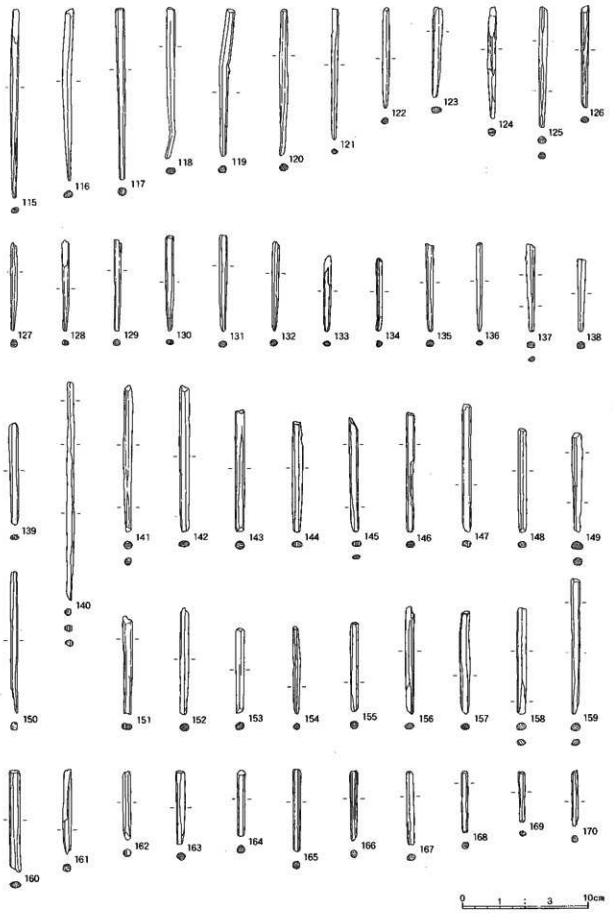

115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
0
1
3
10cm

図28　F区出土遺物－6

表 2 縄文時代土器

層位	番号	調査区	出土地点	出土層位	器種	部位	外面色	内面色	文様・調整等	備考
6	1	A区	第3トレンチ東層	淡鉄	鉢部		10YR8/2灰白色	10YR8/3浅黄橙色	単軸絡条体第4類	縄線流入
	2	A区	第3トレンチ東層	淡鉄	鉢部		10YR5/1褐灰色	10YR7/3にぶい黄橙色	LR、隆線貼付	
	4	A区	第3トレンチ東層	淡鉄	鉢部		10YR6/2灰黄褐色	7.5YR6/4にぶい橙色	LR	
	4	A区	第3トレンチ東層	淡鉄	鉢部~底部		2.5YR4/2灰赤色	7.5YR6/6橙色	LR斜位	縄線流入
	7	A区	第3トレンチ東層	淡鉄	鉢部		10YR8/2灰黄褐色	10YR5/2灰黄褐色	単軸絡条体第1類	縄線流入
	8	A区	第3トレンチ東層	淡鉄	鉢部		10YR6/3にぶい黄橙色	10YR7/3にぶい黄橙色	単軸絡条体第1類	
14	1	B区	SK-4	4層	淡鉄	口縁部~胴部	10YR5/2灰黄褐色	10YR6/2灰黄褐色	沈線間に巳充填	
	1	B区	SK-4	1~5層	鉄	口縁部~底部	7.5YR6/4にぶい橙色	7.5YR6/4にぶい橙色	沈線間に巳充填	
	3	B区	SK-4	1~5層	淡鉄	口縁部	10YR5/1黒褐色	10YR3/1黒褐色	RL縄・縦回転で形状	LR縄を切り返し、内面無数ナデ調整
	4	B区	SK-4	1~5層	淡鉄	口縁部	10YR5/2灰黄褐色	10YR5/2灰黄褐色	沈線間に巳RL充填	
	5	B区	SK-4	1~5層	淡鉄	口縁部	10YR4/1褐灰色	10YR4/1褐灰色	短軸絡条体第5類	口縁折り返し
	6	B区	SK-4	1~5層	淡鉄	口縁部	10YR7/4にぶい黄橙色	10YR7/3にぶい黄橙色	沈線	
	7	B区	SK-4	1~5層	鉢	胴部	5YR4/3赤褐色	7.5YR3/1黒褐色	沈線間に巳充填	
	8	B区	SK-4	1~5層	淡鉄	胴部	7.5YR3/3にぶい黄橙色	7.5YR4/1褐灰色	沈線間に巳RL充填	内面縦磨き調著
	9	B区	SK-4	1~5層	淡鉄	胴部	7.5YR5/2灰褐色	10YR5/3にぶい黄橙色	沈線間に巳充填	
	10	B区	SK-4	1~5層	淡鉄	胴部	10YR4/1褐灰色	10YR6/2灰黄褐色	RL縄文後沈線	
	11	B区	SK-4	1~5層	淡鉄	胴部	10YR7/3にぶい黄橙色	10YR8/3浅黄橙色	RL斜位	
	12	B区	SK-4	1~5層	淡鉄	胴部	10YR5/3にぶい黄橙色	N2/0黒色	RL縦位	
	13	B区	SK-4	1~5層	淡鉄	胴部	10YR8/3浅黄橙色	10YR5/1褐灰色	LR	
	14	B区	SK-4	1~5層	鉢	胴部	7.5YR6/6橙色	10YR3/1黒褐色	沈線間に巳充填	
	15	B区	SK-4	1~5層	淡鉄	胴部	10YR4/1褐灰色	10YR5/2灰黄褐色	単軸絡条体第1類	
	16	B区	SK-4	1~5層	淡鉄	底部	10YR7/4にぶい黄橙色	2.5YR4/2暗赤色	無文部	
	17	B区	SK-4	1~5層	淡鉄	底部	10YR8/2灰黄褐色	2.5YR6/2灰黄色	無文部	
17	25	B区	第1トレンチ東層	淡鉄	鉢部		7.5YR6/3にぶい橙色	7.5YR7/4にぶい橙色	口縁部横位結束帯上、胴部LR	縄線流入
	26	B区	第1トレンチ東層	淡鉄	鉢部		10YR7/2にぶい黄橙色	7.5YR6/4にぶい橙色	直線的沈線、ケヅ状沈線	縄線流入
	27	B区	第1トレンチ東層	淡鉄	鉢部		10YR7/4にぶい黄橙色	10YR7/6明黄色	単軸絡条体第1類	縄線流入
	28	B区	第1トレンチ東層	淡鉄	鉢部		10YR8/3浅黄橙色	10YR8/2灰白色	単軸絡条体第1類	縄線流入
	29	B区	CN-214 東層	淡鉄	鉢部		10YR7/3にぶい黄橙色	10YR7/2にぶい黄橙色	直前段反撚RRL	縄線流入
	30	B区	第1トレンチ東層	淡鉄	鉢部		10YR7/2にぶい黄橙色	10YR7/2にぶい黄橙色	RL、LR結束可種単位	縄線流入
	31	B区	第1トレンチ	淡鉄	鉢部		10YR8/4にぶい黄橙色	7.5YR7/4にぶい橙色	L	
	32	B区	第1トレンチ東層	淡鉄	鉢部		10YR7/2にぶい黄橙色	10YR7/3にぶい黄橙色	RL斜位	
	33	B区	CO-215 東層	淡鉄	鉢部		10YR8/4にぶい黄橙色	7.5YR7/4にぶい橙色	RL	
	34	B区	第1トレンチ東層	淡鉄	口縁部		7.5YR7/4にぶい橙色	10YR6/7灰黄褐色	口縁部横位結束帯、胴部RL縦位	
	35	B区	第1トレンチ東層	淡鉄	口縁部		10YR7/3にぶい黄橙色	10YR8/2灰白色	燃糸側面厚痕	
	36	B区	CO-215 東層	淡鉄	胴部		7.5YR6/6橙色	5YR6/6橙色	LR、LR結束第2種	
	37	B区	DA-214 東層	淡鉄	胴部		7.5YR5/4にぶい黄橙色	5YR5/4にぶい赤褐色	LR、LR結束第2種	
	38	B区	第1トレンチ	淡鉄	胴部		7.5YR7/4にぶい橙色	7.5YR7/3明褐灰色	LRL	
	39	B区	第1トレンチ	淡鉄	胴部		10YR8/3にぶい黄橙色	10YR8/3にぶい黄橙色	RL縦位	
	40	B区	第1トレンチ東層	淡鉄	胴部		10YR8/3にぶい黄橙色	7.5YR7/4にぶい橙色	RL斜位	
	41	B区	DA-214 東層	淡鉄	胴部		10YR7/3にぶい黄橙色	10YR7/3にぶい黄橙色	LR、LR結束第1種	
	42	B区	第1トレンチ東層	淡鉄	胴部		10YR6/2灰黄褐色	10YR6/4にぶい黄橙色	RL縦位	
	43	B区	CO-215 東層	淡鉄	胴部		10YR7/3にぶい黄橙色	7.5YR6/4にぶい橙色	RL	
	44	B区	第1トレンチ	淡鉄	胴部		7.5YR6/4にぶい橙色	10YR7/4にぶい黄橙色	L縦位	
	45	B区	第1トレンチ	淡鉄	胴部		7.5YR7/4にぶい橙色	5YR6/6橙色	LR	
	46	B区	DA-214 東層	淡鉄	胴部		7.5YR6/6橙色	5YR5/4にぶい赤褐色	LR	
	47	B区	第1トレンチ	淡鉄	胴部		5YR6/6橙色	5YR6/6橙色	LR	
	48	B区	第1トレンチ東層	淡鉄	胴部		10YR8/4浅黄橙色	7.5YR7/4にぶい橙色	RL	
	49	B区	第1トレンチ東層	淡鉄	胴部		10YR7/4褐灰色	10YR5/1褐灰色	RL	
	50	B区	第1トレンチ東層	淡鉄	口縁部		10YR8/3浅黄橙色	10YR7/3にぶい黄橙色	沈線	口唇小波状
	51	B区	第1トレンチ東層	淡鉄	口縁部		7.5YR5/1褐灰色	7.5YR7/3明褐灰色	沈線	口唇小波状
	52	B区	第1トレンチ東層	淡鉄	口縁部		10YR8/3浅黄橙色	10YR7/4にぶい黄橙色	平行沈線、縦手状沈線	
	53	B区	第1トレンチ東層	淡鉄	口縁部		10YR8/4浅黄橙色	10YR8/4浅黄橙色	平行沈線	
	54	B区	DA-214 東層	淡鉄	口縁部		10YR7/4にぶい黄橙色	10YR7/3にぶい黄橙色	平行沈線	
	55	B区	第1トレンチ東層	淡鉄	口縁部		7.5YR6/4にぶい橙色	7.5YR6/4にぶい橙色	平行沈線	
	56	B区	DA-214 東層	淡鉄	口縁部		7.5YR7/6橙色	7.5YR7/6橙色	沈線、RL縦位	
	57	B区	DA-214 東層	淡鉄	口縁部		7.5YR7/6橙色	7.5YR6/4浅黄橙色	沈線、RL縦位	
	58	B区	DA-214 東層	淡鉄	口縁部		N6/0灰色	10YR6/2灰黄褐色	短軸絡条体第5類	口縁折り返し
	59	B区	CO-214 東層	淡鉄	口縁部		10YR8/3にぶい黄橙色	10YR6/3灰黄褐色	LR	口縁折り返し
	60	B区	第1トレンチ	淡鉄	口縁部		2.5YR8/2灰白色	2.5YR8/2灰白色	沈線、LR縦位	
	61	B区	第1トレンチ東層	淡鉄	口縁部		5YR6/6橙色	5YR5/6明赤褐色	沈線、隆線	
	62	B区	DA-214 東層	淡鉄	口縁部		7.5YR6/6橙色	7.5YR5/3にぶい褐色	LR	内外面磨き調著
18	63	B区	第1トレンチ東層	淡で	口縁部		7.5YR6/4にぶい橙色	7.5YR5/4にぶい褐色	櫛目状沈線	口縁波状
	64	B区	DC-220 東層	淡で	胴部		N3/0暗灰色	7.5YR6/4にぶい橙色	櫛目状沈線	
	65	B区	DC-220 東層	淡で	胴部		2.5YR2/1黒色	10YR5/4にぶい黄橙色	櫛目状沈線	
	66	B区	DC-220 東層	淡で	胴部		10YR8/3にぶい黄橙	7.5YR6/4にぶい橙色	櫛目状沈線	
	67	B区	DC-220 東層	淡で	胴部		N3/0暗灰色	7.5YR6/4にぶい橙色	櫛目状沈線	
	68	B区	第1トレンチ東層	淡で	胴部		10YR8/2浅黄橙色	7.5YR6/6橙色	櫛目状沈線	
	69	B区	DC-220 東層	淡で	胴部		10YR8/3にぶい黄橙色	7.5YR6/4にぶい橙色	櫛目状沈線	
	70	B区	第1トレンチ	淡で	胴部		10YR8/3にぶい黄橙色	7.5YR8/8橙色	櫛目状沈線	
	71	B区	DA-214 東層	淡鉄	胴部		N3/0暗灰色	2.5YR7/3灰黄色	沈線	
	72	B区	DA-214 東層	淡鉄	胴部		10YR8/1褐灰色	10YR6/2灰黄褐色	沈線	
	73	B区	第1トレンチ東層	淡鉄	胴部		10YR7/3にぶい黄橙色	10YR7/4にぶい黄橙色	沈線	
	74	B区	第1トレンチ東層	淡鉄	胴部		10YR8/4浅黄橙色	10YR7/4にぶい黄橙色	沈線	
	75	B区	第1トレンチ	淡鉄	胴部		7.5YR8/4にぶい黄橙色	10YR6/2灰黄褐色	沈線	
	76	B区	第1トレンチ	淡鉄	胴部		7.5YR7/3にぶい黄橙色	7.5YR4/1褐灰色	沈線	
	77	B区	第1トレンチ	淡鉄	胴部		10YR6/3にぶい黄橙色	10YR6/2灰黄褐色	沈線、櫛目状沈線	
	78	B区	第1トレンチ東層	淡鉄	胴部		7.5YR8/4にぶい黄橙色	7.5YR8/4にぶい橙色	沈線	
	79	B区	第1トレンチ	淡鉄	胴部		7.5YR3/2灰褐色	10YR4/1褐灰色	沈線	
	80	B区	DB-214 SD-5埋土	淡鉄	胴部		10YR7/3にぶい黄橙色	10YR8/3にぶい黄橙色	沈線	
	81	B区	第1トレンチSK-3埋土	淡鉄	胴部		7.5YR6/4にぶい橙色	7.5YR6/3にぶい黄橙色	沈線間に巳RL充填	
	82	B区	第1トレンチ東層	淡鉄	胴部		10YR8/2灰白色	10YR8/4浅黄橙色	短軸絡条体第5類	
	83	B区	第1トレンチ	淡鉄	胴部		10YR8/2灰白色	10YR8/3にぶい黄橙色	短軸絡条体第5類	
	84	B区	第1トレンチ東層	淡鉄	胴部		10YR7/3にぶい黄橙色	10YR8/3浅黄橙色	短軸絡条体第5類	

表2　縄文時代土器（続き）

掲図	番号	調査区	出土地点	出土層位	器種	部位	外面色	内面色	文様・調節等	備考
18	85	B区	第1トレンチ	深耕	鉢	胴部	7.5YR7/3にぶい橙色	7.5YR7/4にぶい橙色	格子状沈線	
	86	B区	第1トレンチ	重層	深鉢	胴部	10YR4/1褐灰色	10YR4/1褐灰色	RL	
	87	B区	第1トレンチ	重層	深鉢	胴部	7.5YR4/1褐灰色	10YR4/1褐灰色	RL反施文後手打沈巻	
	88	B区	第1トレンチ		深鉢	胴部	10YR5/1褐灰色	10YR7/6橙色	沈線、隆線	
21	4	C区	第1トレンチ		土製円盤		7.5YR4/2褐灰色	7.5YR5/3にぶい褐色	無文部	縄地混入
	5	C区	第1トレンチ		深鉢	口縁部	10YR6/3にぶい黄橙色	10YR6/3にぶい黄橙色	LR	縄地混入
	6	C区	第1トレンチ		深鉢	胴部	10YR7/4にぶい黄橙色	10YR7/4にぶい黄橙色	単軸絡条体第1類	
	7	C区	FJ－247　SD－1	第4層	深鉢	口縁部	10YR7/3にぶい黄橙色	10YR8/3浅黄橙色	縄文、黒色縁、無縁に近	
	8	C区	第1トレンチII, III層		深鉢	胴部	10YR6/3にぶい黄橙色	7.5YR6/4にぶい橙色	RL	
	9	C区	第1トレンチ		深鉢	胴部	10YR7/4にぶい黄橙色	7.5YR6/4にぶい橙色	結束第2種	
	10	C区	第1トレンチ		深鉢	胴部	7.5YR5/4にぶい褐色	5YR5/6明赤褐色	LR、LR結束第2種	
	11	C区	第1トレンチ		深鉢	胴部	10YR7/3にぶい黄橙色	10YR7/4にぶい黄橙色	沈線	
	12	C区	第1トレンチII, III層		深鉢	胴部	5YR5/4にぶい赤褐色	5YR5/6明赤褐色	沈線、RL	
	13	C区	FF－248　SI－2層上		深鉢	胴部	10YR6/3にぶい黄橙色	N2/0黒色	沈線間にLR充填	
	14	C区	FF－248　SI－2層上		深鉢	胴部	10YR4/1褐灰色	10YR4/2灰黄褐色	沈線	
	15	C区	FF－248　SI－2層上		深鉢	胴部	10YR7/4にぶい黄橙色	2.5Y3/1黒褐色	沈線間にLR充填	
	16	C区	第1トレンチII, III層		深鉢	胴部	10YR5/2灰黄褐色	7.5YR5/2灰褐色	沈線間にRL充填	
	17	C区	第1トレンチII, III層		深鉢	胴部	10YR5/2灰黄褐色	10YR6/2灰黄褐色	LR、LR結束第1種	
	18	C区	第1トレンチ		深鉢	底部	7.5YR6/3にぶい褐色	10YR6/3にぶい黄橙色	無文部	外面磨き顕著
23	1	F区	DT－224　7層		深鉢	胴部	7.5YR4/4にぶい褐色	7.5YR5/3にぶい褐色	LR、RL結束第1種沢	縄地混入
	2	F区	EA－223　7、8層		深鉢	口縁部	7.5YR7/4にぶい橙色	10YR7/2にぶい黄橙色	RL上に粘着貼付	
	3	F区	EB－223　1、2層		深鉢	胴部	10YR7/3にぶい黄橙色	10YR7/3にぶい黄橙色	LR無文帯状沈線	
	4	F区	EB－223　1、2層		深鉢	胴部	7.5YR7/3にぶい橙色	7.5YR6/3にぶい橙色	RL無文帯状沈線	
	5	F区	第2トレンチ		深鉢	胴部	7.5YR8/3浅黄橙色	N3/0暗灰色	縄文無文波状沈線	縄文摩滅
	6	F区	EB－223　1、2層		深鉢	胴部	7.5YR7/4にぶい橙色	N3/0暗灰色	LR縄位、沈線	
	7	F区	EB－223　7、8層		深鉢	胴部	10YR6/2灰黄褐色	10YR7/3にぶい黄橙色	LR、RL結束第1種沢	
	8	F区	DT－223　7層		深鉢	胴部	7.5YR4/4にぶい褐色	10YR2/1黒色	RL	
	9	F区	EA－223　7、8層		深鉢	胴部	7.5YR6/4にぶい黄橙色	10YR6/4にぶい黄橙色	RL	
	10	F区	EA－223　7、8層		深鉢	胴部	10YR6/4にぶい黄橙色	10YR3/1黒褐色	RL	
	11	F区	EB－223　1、2層		深鉢	胴部～底部	7.5YR4/3褐色	10YR5/4にぶい黄橙色	LR	

表3　縄文時代石器

掲図	番号	器種	石質	調査区	出土地点	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
6	5	使用痕有る剥片	珪質頁岩	A区	第6トレンチ	重層	5.7	6.1	2.0	51.6	
	6	凹み石	凝灰岩	A区	第6トレンチ	重層	9.9	7.0	3.3	205.7	
15	18	石皿	安山岩	B区	SK－4	5層	24.7	19.5	6.9	4620.0	タール状付着物あり
	19	石皿	安山岩	B区	SK－4	7層	24.6	30.9	9.8	10200.0	タール状付着物あり
16	20	石皿	安山岩	B区	SK－4	7層	25.5	17.2	6.4	4530.0	
	21	磨	安山岩	B区	SK－4	7層	10.5	9.2	2.7	342.1	
18	89	石棒状	安山岩	B区	第1トレンチ		6.2	8.6	5.9	515.9	
	90	敲き石	安山岩	B区	第1トレンチ	1層	11.5	4.1	3.8	281.3	
19	91	磨製石斧	閃緑岩	B区	第1トレンチ		6.6	4.5	2.8	120.0	
	92	磨製石斧	砂岩	B区	第1トレンチ		5.7	2.8	0.9	21.1	
	93	トランシェ様石器	珪質頁岩	B区	第1トレンチ		6.4	3.4	1.3	23.9	
	94	石鏃	珪質頁岩	B区	第1トレンチ		2.8	1.2	0.7	1.1	
	95	石匙	玉髄質頁岩	B区	第1トレンチ		3.2	3.6	0.9	7.8	
	96	使用痕有る剥片	珪質頁岩	B区	第1トレンチ		3.2	3.0	1.0	4.6	
	97	使用痕有る剥片	珪質頁岩	B区	第1トレンチ	II層	3.4	5.0	0.7	10.3	
	98	一次加工有る剥片	珪質頁岩	B区	第1トレンチ		10.0	5.7	3.1	75.4	
21	3	使用痕有る剥片	玉髄質頁岩	C区	FF－248		3.6	2.0	0.9	4.5	
23	12	石棒状	石英安山岩	F区	DT－224	2層	12.9	8.4	7.0	1020.3	

表4　平安時代土器

掲図	番号	調査区	出土地点	出土層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	残存率(%)	備考
16	22	B区	SK－2.5	表土	土師器	甕	－	－	－	B、S	B	－	
	23	B区	SK－2.6	表土	土師器	甕	－	－	－	B、S	B	－	
	24	B区	SD－2	表土	土師器	甕	－	<46>	(6.2)	S	B	40	
19	99	B区	第1トレンチ	須恵器	坏	(12.2)	5.3	5.3	針	A	30		
	100	B区	第1トレンチ　II～III層	土師器	坏	(13.6)	(5.3)	5.4	B、針	C	40		
	101	B区	第1トレンチ	土師器	坏	－	－	5.3	B	B	50	底部内面にも赤彩痕、その他内面全体に赤彩	
	102	B区	第1トレンチ　III層	須恵器	坏	－	－	－	W	A	30	外面に火襷痕	
	103	B区	第1トレンチ　III層	須恵器	甕	－	<21>	－	W	B	30		
	104	B区	第1トレンチ	土師器	甕	－	<14>	(9.5)	B	B	30		
	105	B区	第1トレンチ	土師器	甕	－	<20>	－	黒	C	－		
	106	B区	第1トレンチ　III層	土師器	甕	－	<20>	6.4	B	B	40		
	107	B区	第1トレンチ　III層	土師器	ミニチュア甕	－	<1.7>	3.5	W、C	B	80		
21	1	C区	SD－1	表土	土師器	甕	(14.6)	13.5	(8.5)	黒、B	B	70	
	2	C区	SD－1	表土	土師器	甕	(13.6)	<42>	－	S	B	40	
	19	C区	FH－247		土師器	甕	－	<48>	－	C、W	B	－	
	20	C区	FH－247		土師器	坏	－	<1.2>	(5.5)	B、R	B	30	
	21	C区	第1トレンチ		土師器	坏	－	<1.0>	4.8	B、R	B	40	
	22	C区	第1トレンチ		土師器	坏	－	<1.3>	(5.7)	C、W	B	40	
	23	C区	第1トレンチ		土師器	坏	－	<1.2>	－	B	B	30	
24	13	F区	EA－224　7層		土師器	坏	12.5	5.9	5.2	B、C	C	100	
	14	F区	DT－224　7層		土師器	坏	14.2	5.3	6.2	C	B	70	
	15	F区	DT－224　7層		土師器	坏	(13.1)	5.4	6.0	C	B	50	
	16	F区	EA－224　7層		土師器	坏	(13.1)	5.7	5.5	B、C	C	50	
	17	F区	DT－223　2層		土師器	坏	(12.3)	6.3	(4.5)	C、W	C	40	

表4　平安時代土器（続き）

層位	番号	調査区	出土地点	出土層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	残存率(%)	備考
24	18	FIX	EA－224	7層	土師器	坏	(13.0)	<5.2>	－	C	C	30	
	19	FIX	EA－223	7，8層	土師器	坏	(12.4)	<5.0>	－	B	C	40	
	20	FIX	EA－224	7層	土師器	坏	(13.2)	<4.8>	－	C	C	40	
	21	FIX	EA－224	7層	土師器	坏	(13.2)	<4.2>	－	C	C	40	
	22	FIX	EA－223	7，8層	土師器	坏	(13.0)	<3.8>	－	B	B	30	
	23	FIX	EA－223	7，8層	土師器	坏	(14.0)	<3.8>	－	C	C	30	
	24	FIX	DT－224	7層	土師器	坏	(12.5)	<4.5>	－	B	C	30	黒色粒子混入胴書
	25	FIX	DT－224	7層	土師器	坏	(12.0)	<3.5>	－	C	B	30	
	26	FIX	EA－224	7層	土師器	坏	(12.4)	<3.9>	－	W，C	B	40	内面黒色処理，磨き調整
	27	FIX	EA－223	7層	土師器	坏	－	－	－	C	C	－	
	28	FIX	第2トレンチ	2層	土師器	坏	－	－	－	C	C	－	
	29	FIX	EA－223	7，8層	土師器	坏	－	－	－	C	B	－	
	30	FIX	EA－224	7層	土師器	坏	－	－	－	B	B	－	
	31	FIX	EA－224	7層	土師器	坏	－	－	－	B，針	B	－	
	32	FIX	EA－224	7層	土師器	坏	－	－	－	C	B	－	
	33	FIX	EB－223	7，8層	土師器	坏	－	－	－	B	B	－	
	34	FIX	EA－224	7層	土師器	坏	－	－	－	C	C	－	
	35	FIX	EA－223	7，8層	土師器	坏	－	－	－	B，針	B	－	
	36	FIX	EA－223	7層	土師器	坏	－	－	－	B	C	－	
	37	FIX	EA－224	7層	土師器	坏	－	－	－	C	B	－	
	38	FIX	DT－224	7層	土師器	坏	－	－	－	C	B	－	
	39	FIX	第2トレンチ	2層	土師器	坏	－	－	－	C	B	－	
	40	FIX	EA－224	7層	土師器	坏	－	－	－	C	B	－	
	41	FIX	EA－224	7層	土師器	坏	－	－	－	B，R	B	－	
	42	FIX	EB－223	7，8層	土師器	坏	－	－	－	B	B	－	
25	43	FIX	EA－223	7層	土師器	坏	－	<3.0>	(5.7)	B	C	30	
	44	FIX	DS－223	7層	土師器	坏	－	<2.0>	4.9	B，C，W，針	C	50	
	45	FIX	EA－224	7層	土師器	坏	－	<1.5>	5.0	B	B	50	
	46	FIX	EA－224	7層	土師器	坏	－	<2.9>	5.5	C	B	40	
	47	FIX	EA－223	7，8層	土師器	壷	－	<4.8>	(6.0)	B，C	B	40	
	48	FIX	EB－223	1，2層	土師器	坏	－	<1.0>	5.5	B，W	B	40	
	49	FIX	EB－223	7，8層	土師器	壷	－	－	－	W，C	B	－	
	50	FIX	EB－223	1，2層	土師器	坏	－	－	－	C	B	－	
	51	FIX	EA－223	7，8層，7層	土師器	坏	－	－	－	C，B	B	－	
	52	FIX	EA－224	7層	土師器	坏	－	－	－	C，B	B	－	
	53	FIX	EA－223	7層	土師器	坏	－	－	－	C	B	－	
	54	FIX	EA－223	7，8層	土師器	坏	－	－	－	B	B	－	
	55	FIX	EA－223	7層	土師器	坏	－	－	－	C	C	－	
	56	FIX	DT－224	7層	土師器	坏	－	－	－	W	B	－	
	57	FIX	DS－223	7層	土師器	坏	－	－	－	C	B	－	
	58	FIX	EA－223	7，8層	土師器	坏	－	－	－	B	C	－	
	59	FIX	DT－224	7層	土師器	壷	－	<3.8>	(8.0)	粗	C	30	
	60	FIX	第2トレンチ	2層	土師器	壷	－	<2.6>	(8.8)	C	B	30	底部本来痕
	61	FIX	EA－223	7層	土師器	壷	－	<2.2>	－	B	B	－	
	62	FIX	EA－223	7層	須恵器	坏	(12.5)	5.1	－	C，針	B	40	内外面火棒痕
	63	FIX	EA－223	7，8層	須恵器	坏	(10.9)	<5.4>	－	W，針	B	30	底部内面付近に墨痕？
	64	FIX	EA－223	7，8層	須恵器	坏	(12.7)	<3.6>	－	W，針	B	30	外面に火棒痕
	65	FIX	EA－224	7層	須恵器	壷	(22.2)	<5.1>	－	W	A	30	外面に刻書

表5　平安時代木製品

層位	番号	調査区	グリッド	出土層位	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	樹種	備考
26	66	FIX第2トレンチ	EA－224	7層	曲げ物側板	－	3.2	2.5	スギ	内面に切目あり，層皮層りによる接合部
	67	FIX第2トレンチ	EA－224	7層	曲げ物側板	15.0	4.6	0.6		内面に切目あり
	68	FIX第2トレンチ	EA－224	7層	曲げ物側板	8.1	4.0	0.7		内面に切目あり
	69	FIX第2トレンチ	EB－224	7層	曲げ物側板	10.5	5.2	0.6		内面に切目あり
	70	FIX第2トレンチ	DT－223・4	7層	曲げ物側板	15.6	4.1	0.7		内面に切目あり
	71	FIX第2トレンチ	EA－224	7層	曲げ物側板	14.6	4.5	0.7	スギ	内面に切目あり
	72	FIX第2トレンチ	EB－224	7層	曲げ物側板	13.6	2.8	0.6		内面に切目あり
	73	FIX第2トレンチ	EA－224	7層	曲げ物側板	14.3	3.1	0.4		切目なし
	74	FIX第2トレンチ	DT－223・4	7層	曲げ物側板	15.4	2.5	0.4		切目なし
	75	FIX第2トレンチ	EA－224	7層	曲げ物側板	11.6	4.1	0.6		切目なし
	76	FIX第2トレンチ	DT－223・4	7層	曲げ物側板	9.4	2.3	0.7		内面切目あり，部分的に炭化
	77	FIX第2トレンチ	EA－224	7層	曲げ物底板	－	－	1.0		納内の底か，木釘あり
	78	FIX第2トレンチ	EB－224	7層	板状	6.3	1.3	0.9		両側面に溝状の窪みあり
	79	FIX第2トレンチ	EA－223・4	7層	管状	5.6	0.8	0.7		中空，両端閉ぢ板ぎ
27	80	FIX第2トレンチ	EA－224	7層	板状	16.6	2.8	1.5	アスナロ	一端につまみ状の加工あり
	81	FIX第2トレンチ	EA－224	7層	棒状	13.1	1.0	1.0		両端を先般に加工
	82	FIX第2トレンチ	EA－224	7層	棒状	11.3	1.2	0.8		
	83	FIX第2トレンチ	EA－224	7層	棒状	11.5	1.3	0.8		
	84	FIX第2トレンチ	DT－223・4	7層	棒状	14.1	2.0	0.8		
	85	FIX第2トレンチ	DT－223・4	7層	棒状	13.2	1.9	0.7		
	86	FIX第2トレンチ	EA－224	7層	棒状	22.8	2.5	0.9		
	87	FIX第2トレンチ	EA－224	7層	棒状	26.3	2.1	0.6		
	88	FIX第2トレンチ	EA－224	7層	棒状	20.8	1.1	1.0	アスナロ	
	89	FIX第2トレンチ	EA－224	7層	棒状	26.6	1.8	1.3		
	90	FIX第2トレンチ	EA－224	7層	棒状	26.6	1.3	0.9		
	91	FIX第2トレンチ	EA－224	7層	棒状	18.9	1.4	0.7		
	92	FIX第2トレンチ	EA－224	7層	棒状	18.1	1.6	0.6		
	93	FIX第2トレンチ	EA－224	7層	棒状	12.5	1.1	0.7		
	94	FIX第2トレンチ	DT－223・4	7層	棒状	14.4	1.0	0.9		

表5　平安時代木製品（続き）

遺構	番号	調査区	グリッド	出土層位	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	樹種	備考
27	95	FK第2トレンチ	EA−223-4	7層	棒状	13.1	0.8	0.7		
	96	FK第2トレンチ	EA−224	7層	棒状	6.0	0.8	0.5		
	97	FK第2トレンチ	EA−223-4	7層	棒状	10.3	0.8	0.5		
	98	FK第2トレンチ	EA−223-4	7層	棒状	9.1	1.0	0.8		
	99	FK第2トレンチ	EA−223-4	7層	棒状	8.4	0.9	0.6		
	100	FK第2トレンチ	EA−223-4	7層	棒状	10.6	1.1	0.5		
	101	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	棒状	16.2	0.8	0.4		
	102	FK第2トレンチ	EA−223-4	7層	棒状	13.9	0.7	0.7		
	103	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	棒状	13.2	0.9	0.4		
	104	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	棒状	11.7	0.8	0.5		
	105	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	棒状	12.9	0.7	0.8		
	106	FK第2トレンチ	EA−224	7層	杙	13.6	0.7	0.5		端部残存
	107	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	12.5	0.6	0.5		端部残存
	108	FK第2トレンチ	EA−223-4	7層	杙	12.0	0.7	0.5		端部残存
	109	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	11.8	0.7	0.5		端部残存
	110	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	13.0	0.8	0.5		端部残存
	111	FK第2トレンチ	EA−224	7層	杙	12.3	0.7	0.5		端部残存
	112	FK第2トレンチ	EA−223-4	7層	杙	11.4	0.7	0.5		端部残存
	113	FK第2トレンチ	EA−224	7層	杙	14.1	1.0	0.4	アスナロ	端部残存
	114	FK第2トレンチ	EA−223-4	7層	杙	17.9	0.8	0.6		端部残存
28	115	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	15.1	0.6	0.5		端部残存
	116	FK第2トレンチ	EA−224	7層	杙	13.8	0.9	0.6		端部残存
	117	FK第2トレンチ	EA−224	7層	杙	13.7	0.7	0.6		端部残存
	118	FK第2トレンチ	EA−223-4	7層	杙	12.1	0.7	0.5		端部残存
	119	FK第2トレンチ	EA−223-4	7層	杙	11.8	0.8	0.6		端部残存
	120	FK第2トレンチ	EA−223-4	7層	杙	11.7	0.7	0.6		端部残存
	121	FK第2トレンチ	EA−223-4	7層	杙	10.5	0.6	0.4		端部残存
	122	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	8.0	0.6	0.5		端部残存
	123	FK第2トレンチ	EA−224	7層	杙	7.2	0.8	0.5		端部残存
	124	FK第2トレンチ	EA−223-4	7層	杙	8.9	0.7	0.6		端部残存
	125	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	9.7	0.7	0.6		端部残存
	126	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	8.2	0.7	0.5		端部残存
	127	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	7.1	0.5	0.6		端部残存
	128	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	7.3	0.6	0.4		端部残存
	129	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	7.8	0.6	0.5		端部残存
	130	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	7.6	0.6	0.4		端部残存
	131	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	7.7	0.7	0.5		端部残存
	132	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	7.1	0.6	0.5		端部残存
	133	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	6.1	0.6	0.4		端部残存
	134	FK第2トレンチ	EA−223-4	7層	杙	5.8	0.5	0.5		端部残存
	135	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	7.0	0.6	0.5		端部残存
	136	FK第2トレンチ	EA−223-4	7層	杙	7.1	0.5	0.4		端部残存
	137	FK第2トレンチ	EA−223-4	7層	杙	7.0	0.7	0.5		端部残存
	138	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	5.8	0.7	0.6		端部残存
	139	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	8.1	0.8	0.4		両端欠損
	140	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	17.5	0.6	0.5		両端欠損
	141	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	11.7	0.7	0.6		両端欠損
	142	FK第2トレンチ	EA−223-4	7層	杙	11.8	0.8	0.5		両端欠損
	143	FK第2トレンチ	EA−223-4	7層	杙	9.8	0.8	0.6		両端欠損
	144	FK第2トレンチ	EA−223-4	7層	杙	8.8	0.8	0.5		両端欠損
	145	FK第2トレンチ	EA−224	7層	杙	9.2	0.7	0.4		両端欠損
	146	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	9.6	0.7	0.5		両端欠損
	147	FK第2トレンチ	EA−224	7層	杙	10.3	0.7	0.5		両端欠損
	148	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	8.3	0.6	0.5		両端欠損
	149	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	7.9	0.9	0.6		両端欠損
	150	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	11.3	0.5	0.6		両端欠損
	151	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	7.8	0.8	0.5		両端欠損
	152	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	8.5	0.7	0.6		両端欠損
	153	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	6.8	0.7	0.6		両端欠損
	154	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	7.0	0.6	0.5		両端欠損
	155	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	7.1	0.7	0.6		両端欠損
	156	FK第2トレンチ	EA−223-4	7層	杙	8.5	0.7	0.5		両端欠損
	157	FK第2トレンチ	EA−223-4	7層	杙	8.2	0.8	0.5		両端欠損
	158	FK第2トレンチ	EA−223-4	7層	杙	8.5	0.8	0.6		両端欠損
	159	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	10.8	0.7	0.6		両端欠損
	160	FK第2トレンチ	EA−223-4	7層	杙	8.2	0.9	0.5		両端欠損
	161	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	6.8	0.7	0.6		両端欠損
	162	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	5.5	0.6	0.6		両端欠損
	163	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	5.8	0.8	0.6		両端欠損
	164	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	5.3	0.6	0.6		両端欠損
	165	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	6.6	0.6	0.6		両端欠損
	166	FK第2トレンチ	DT−223-4	7層	杙	5.6	0.7	0.6		両端欠損
	167	FK第2トレンチ	EA−224	7層	杙	5.9	0.6	0.5		両端欠損
	168	FK第2トレンチ	EA−224	7層	杙	4.9	0.6	0.5		両端欠損
	169	FK第2トレンチ	EA−224	7層	杙	4.0	0.6	0.4		両端欠損
	170	FK第2トレンチ	EA−224	7層	杙	4.5	0.5	0.5		両端欠損

※観察表の凡例は例言の頁を参照

第3章　まとめ

近野遺跡ではこれまでの度重なる調査により多数の遺構・遺物が確認されている。今回検出された遺構数、遺物量は多くないが、2001年度には隣接地を広範囲に調査している。今回の報告分に関連することも含めて、その調査により明らかになったことも少なくない。それらについての整理・報告は2002年度になるので詳細はあらためて報告することになるが、2001年度の調査所見を含めて全体の傾向を俯瞰すると以下のようになる。

F区の谷を中心にみると、谷左岸側の低位段丘面には主として平安期の遺構が分布していることがわかるが、縄文時代後期の土坑も確認された（B区第4号土坑）。その上位の中位段丘面周辺は遺構の分布は希薄であるが、2001年度の発掘調査で3基の縄文時代後期の甕棺墓が検出された。従来の調査で縄文時代後期の遺構がまとまって確認されているのは現テニスコート付近及び現遺跡広場先端付近で、遺物が最も集中したのは現テニスコート付近にあった谷の斜面地であったが、B区4号土坑及び3基の甕棺墓の検出により、後期の遺構・遺物の分布範囲が従来の所見よりもより西側にまで広がることが確認された。

第3章第3節で述べたように、B区4号土坑は、土層断面の観察から、構築後一旦埋め戻された後再び掘り返されたことが想定されるものである。これが再葬に関わるものであるか否かは更なる検証が必要であることは論を待たないが、今後類似した縄文時代後期の土坑が検出された場合は、より注意して観察、分析する必要があるものと思われる。

F区の谷の右岸側の低位段丘面上には平安時代と縄文時代の遺構が比較的濃密に分布することが2001年度の調査でわかった。縄文時代の遺構は中期後半のものが主体と思われ、1979年に報告された大形住居周辺の遺構に連なる可能性が高いものと考えられるが、削平が広範囲に及ぶため明確ではない。全調査区を通じていえることだが、現在まで林として残されている部分以外は黒色土からその下位に至るまで削平されている区域が大半であった。確認できるのは、底面が削平面より深い遺構に限られることになる。

F区の谷部分は2001年度の調査で本筋と崩落部分で構成されることがわかった。今回報告区域は主として崩落部分にあたるが、本筋部分より離水期が早かったようであり、白頭山・苫小牧火山灰降下以前には既に湿地化していたものと思われる。木製品はそうした湿地部分から出土した。

F区の谷の谷頭付近に位置するC区付近には現相撲場西側の谷も同りこんでいる。今回確認された平安時代の住居跡は二つの谷頭に挟まれた区域に位置することになり、1977年に報告された平安時代の住居跡群に連なるものと思われる。

これまでの調査を通覧すると、平安時代の遺構分布は低位段丘面上に広範囲に展開していることがわかる。従来の遺構、遺物に加えて、今回新たに木製品が検出されたことは、近野遺跡の新たな側面を垣間見せてくれたものと言える。また、隣接する三内丸山遺跡はじめとした周辺遺跡でも多数の平安期の遺構が確認されており、近野遺跡周辺には比較的規模の大きな集落があったことを窺い知ることができる。そうした集落の消長や平安期の土地利用のあり方等を考える上でも、近野遺跡周辺は格好のフィールドになる可能性を秘めているものと思われる。　（太田原　潤）

第４章　自然科学的分析

第１節　青森市近野遺跡出土材の樹種

高橋利彦（木工舎「ゆい」）

１．試料

試料は５点(№１－５)で、平安時代のものとされる木製品・加工材である。いずれもＦ区の低湿地部から検出されており、試料包含層（７層）の上位に白頭山－苫小牧火山灰の堆積が確認されている。

遺跡は青森平野西部の段丘上に位置し、国指定史跡の三内丸山遺跡に隣接している。

２．方法

プレパラートの作製には、筆者が遺物から採取した材片を用いた。材片には少なくとも足掛け２年分を含み、遺物の加工面を避け、かつできるだけ少なくなるよう担当者と協議して採取した。剃刀の刃を用い、試料の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）３面の徒手切片を作製し、これをガムクロラールで封入したプレパラートを生物顕微鏡で観察・同定した。併せて各分類群１点の顕微鏡写真図版を作成した（図版１）。作製したプレパラートはすべて木工舎「ゆい」に保管されている。

３．結果

試料はスギとアスナロに同定された。試料の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質は次のようなものである。なお、学名・和名は「日本の野生植物 木本Ⅰ」（佐竹ほか　1989）にしたがい、一般的性質などについては「木の辞典 第６・７巻」（平井　1989）も参考にした。

・　アスナロ（*Thujopsis dolabrata*）ヒノキ科　№１，２，５

早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はあるが樹脂道はない。放射組織は柔細胞のみよりなる。分野壁孔は小型のヒノキ型（Cupressoid）～スギ型（Taxodioid）で分野あたり１－６個。放射組織は単列、１－15細胞高。

アスナロは本州・四国・九州に自生する日本特産の常緑高木で時に植栽される。県内には変種ヒノキアスナロ（ヒバ）（*T. dolabrata* var. *hondai*）とともに自生する。材の解剖学的特徴では両者は区別できない。材はやや軽軟で保存性は高い。建築・土木・家具・器具材など各種の用途が知られている。

・　スギ（*Cryptomeria japonica*）スギ科　№３，４

早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射組織は柔細胞のみよりなる。分野壁孔はスギ型で分野あたり２－４個。放射組織は単列、１－15細胞高。

スギは本州・四国・九州に自生する常緑高木で、また各地で植栽・植林される。国内では、現在植林面積第一位の重要樹種であり、長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。

以上の同定結果を推定されている用途などとともに一覧表で示す（表1）。

表1　近野遺跡出土材の樹種

試料番号	調査区／グリッド／層位	用途など	樹　種	図
1	F区トレンチ4／EA224付近／7層	不　明	アスナロ	27−80
2	F区トレンチ4／EA224付近／7層	箸　状	アスナロ	27−113
3	F区トレンチ4／EA224付近／7層	曲物状	スギ	26−66
4	F区トレンチ4／EA224付近／7層	曲物状	スギ	26−71
5	F区トレンチ4／EA224付近／7層	棒　状	アスナロ	27−88

4．考察

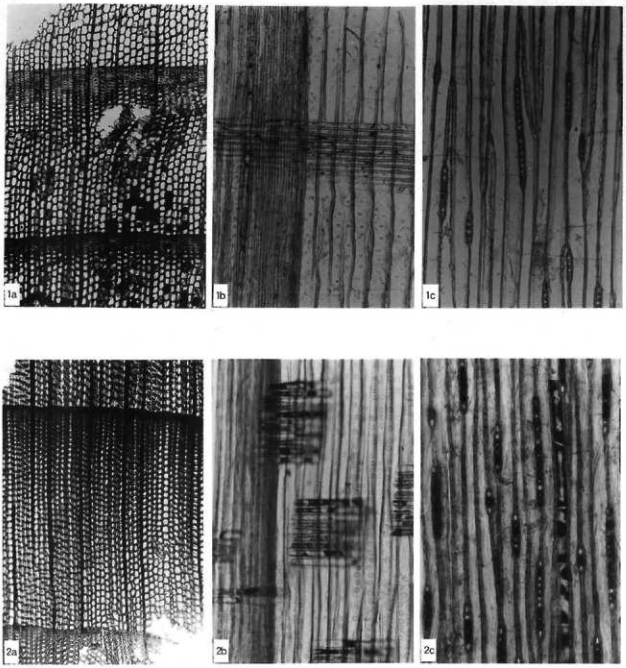
№3・4は薄い小板材で、一方の面には刃物による筋目（刻み）が木目と直交する方向に多数入れられている。№3には樹皮を用いた綴じ目もある。曲物状とされているが曲物としてよいであろう。試料はその側板で、ともにスギ製であった。材質が割裂性に富むことから選択されたものと考える。出土材の用材も、地域によって各種の針葉樹材も用いられているものの、スギとヒノキの用例が最も多い（伊東ほか　1987、伊東　1990）。県内では、黒石市高館遺跡の第86号住居跡（平安時代？）から出土した曲物とされる炭化材の樹種が検討されたが種類は明らかにされていない注（嶋倉　1978）。また、本遺跡の南約3kmに位置する朝日山(2)遺跡の平安時代（9世紀後半〜10世紀前半）とされる第6号井戸跡から検出された曲物はアスナロに同定されている（高橋　MS）。

ちなみに現代では、秋田県の大館曲げワッパはスギ製であるが、県内の金木（北津軽郡金木町）や川内（下北郡川内町）の曲物はヒバ製であるという（岩井　1994）。

注　：一覧表では樹種不詳としながら（備考欄に「スギかヒノキ」の記載あり）、用途別の樹種構成をみた表には曲物がスギとされており、注意が必要である。また、ヒノキの自生は県内では認められていない（上野　1991）が、この点に関しても言及なしに種名のみが記載されている。

引用文献

平井信二　1980「木の辞典 第6・7巻」，かなえ書房.
伊東隆夫・山口和穂・林　昭三・布谷知夫・島地　謙　1987　日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途，木材研究・資料，第23号，42-210.
伊東隆夫　1990　日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ，木材研究・資料，第26号，91-189.
岩井宏實　1994「ものと人間の文化史75 曲物」，法政大学出版局.
佐竹義輔・原　寛・亘理俊次・富成忠夫（編）1989「日本の野生植物 木本Ⅰ」，平凡社.
嶋倉巳三郎　1978　昭和51年度青森県内の遺跡から出土した炭化材の樹種について，「青森県埋蔵文化財調査報告書第40集 黒石市高館遺跡発掘調査報告書（東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査）昭和52年度」，313-322，青森県教育委員会.
高橋利彦　MS　青森市朝日山(2)遺跡出土材の樹種，「朝日山(2)遺跡出土材樹種同定報告書」，6pp，2pls，木工舎「ゆい」.
上野雄規（編）1991「北本州産高等植物チェックリスト」，東北植物研究会.



図版1　1．スギ　No.3
2．アスナロ　No.1
a：木口　x40　b:柾目　x100　c:板目　x100
樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上へ、柾目では左から右。

樹種同定写真

近野遺跡全景空中写真

近野遺跡と三内丸山遺跡

写真１　遺跡の空中写真

A区近景

A区近景

A区第1トレンチ完掘

A区第2トレンチ完掘

A区第3トレンチ完掘

A区第3トレンチ断面

A区第4トレンチ完掘

A区第6トレンチ完掘

写真2　A区の調査

A区第７トレンチ完掘

A区第８トレンチ完掘

A区第８トレンチ断面

A区第９トレンチ完掘

A区第10トレンチ完掘

A区第11トレンチ完掘

B区近景

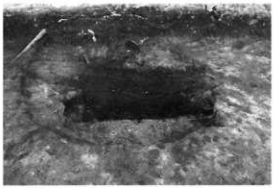
B区調査風景

写真３　Ａ・Ｂ区の調査

B区第1トレンチ断面

B区第2トレンチ断面

B区第4号土坑完掘



B区第4号土坑断面

B区第1～3・5号土坑周辺完掘

B区第1・2号土坑断面

B区第3号土坑完掘

B区第5号土坑断面

写真4　B区の調査

B区第1号竪穴住居跡確認状態

B区第1号溝跡断面

B区第2号溝跡完掘

B区第2号溝跡断面

B区第3号溝跡

B区第3号溝跡断面

B区第5号溝跡

B区第5号溝跡断面

写真5　B区の調査

C区第1号トレンチ

C区第1号トレンチ遺構確認状態

C区第2号トレンチ

C区第2号トレンチ遺構確認状態

C区第3号トレンチ

C区第3号トレンチ断面

C区第4号トレンチ

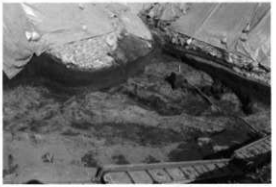
C区第4号トレンチ断面

写真6　C区の調査

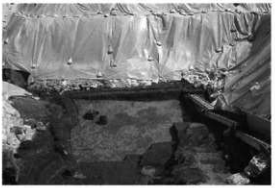
F区近景

F区近景

F区第2トレンチ空中写真



F区第2トレンチ



F区第2トレンチ白頭山・苫小牧火山灰平面産状

F区第2トレンチ白頭山・苫小牧火山灰断面産状

F区第2トレンチ谷底面付近土層断面

F区第2トレンチ調査風景

写真7　F区の調査

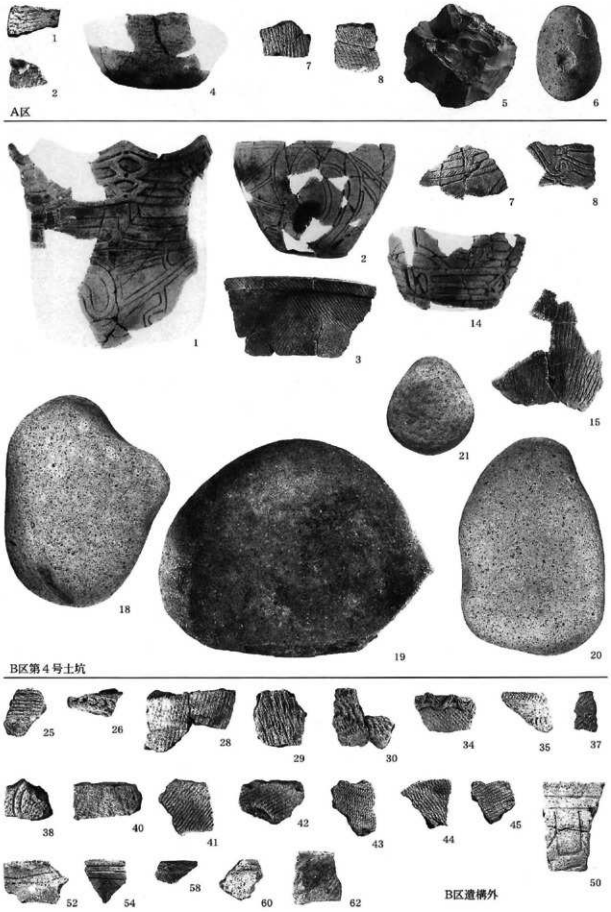


写真8　A・B区出土遺物

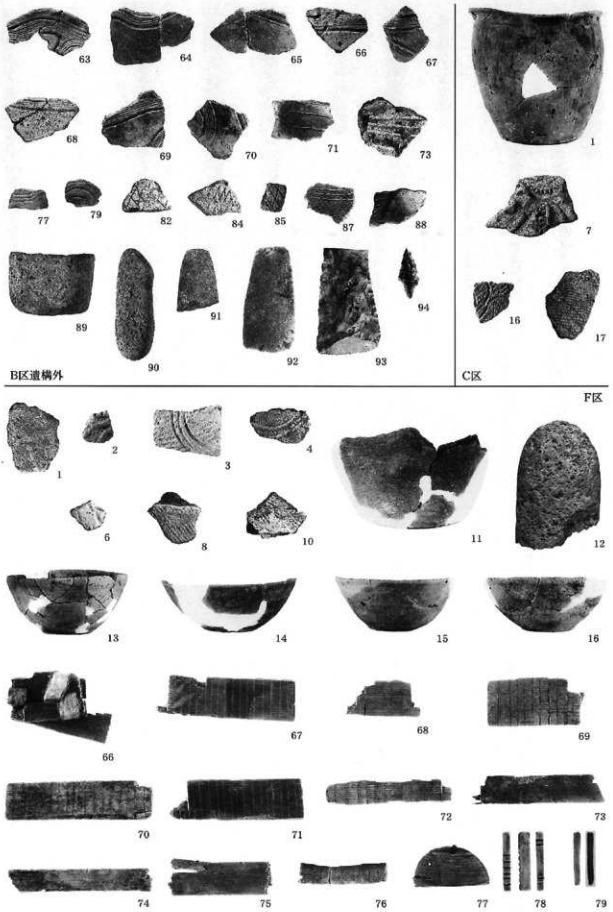


写真9　B・C・F区出土遺物

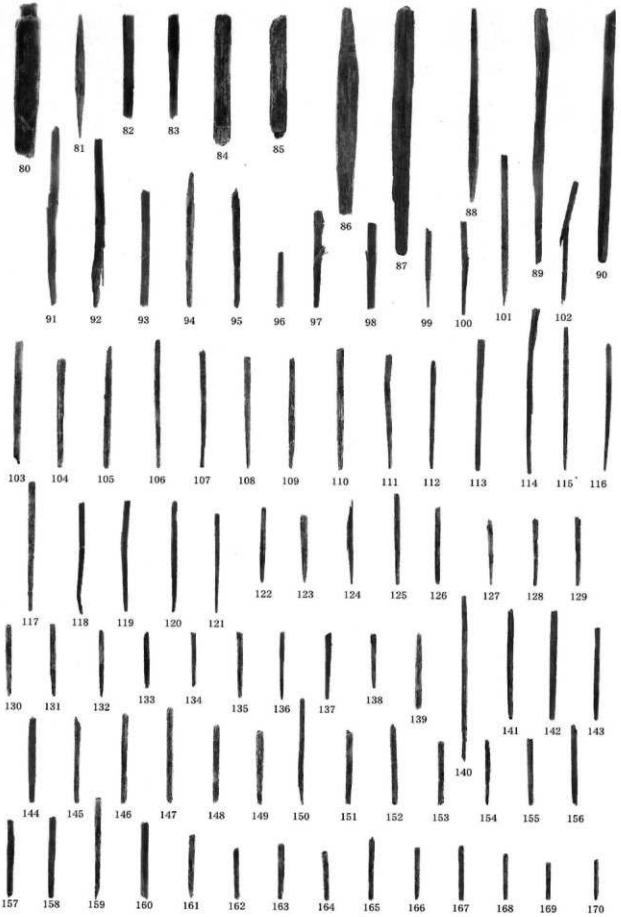

80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170

写真10　F区出土遺物

報告書抄録

フリガナ	チカノイセキ ロク
書名	近野遺跡 Ⅵ
副書名	県立美術館建設事業に伴う遺跡発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第３１５集
編著者名	太田原 潤・赤羽真由美
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒030-0042 青森市大字新城字天田内152-15
発行年月日	2002年３月15日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
近野遺跡 （チカノイセキ）	青森県青森市大字安田字近野219 他 （アオモリケンアオモリシ オオアザヤスダアザチカノイ）	02201	01065	40° 48′ 18″	140° 42′ 17″	20000419 ～ 20000929	3,900	県立美術館建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
近野遺跡	集落跡	縄文 平安	竪穴住居跡 5軒 円形周溝 1基 溝跡 5条 土坑 6基	縄文土器・石器 土師器・須恵器 箸・曲げ物	白頭山苫小牧火山灰の下位から、箸・げ物等の平安時代の木製品が出土した。

青森県埋蔵文化財調査報告書　第３１５集

近　野　遺　跡　Ⅵ

－県立美術館建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－

発行年月日　2002年３月15日
発　　行　青森県教育委員会
編　　集　青森県埋蔵文化財調査センター
〒038－0042 青森市大字新城字天田内152-15
TEL017－788－5701　FAX017－788－5702
印 刷 所　㈱新印刷興業
〒030－0142　青森市大字野木字野尻37－728
TEL017－739－6431

活彩あおもり

―輝くあおもり新時代―